〈調査報告〉

和人の散文説話―継母から殺されかけた姉を救った妹―

大　谷　洋　一

目次　1．解説

1－1　はじめに
1－2　先行研究における和人の散文説話の特徴について
1－2－1　久保寺逸彦を中心に
1－2－2　最新の研究成果
1－3　お銀小銀と本テキストの比較
1－3－1　モチーフの変容
1－3－2　固有人名の消失
1－3－3　話の長編化
1－4　和人の散文説話の叙述人称と日本語の頻出について
1－4－1　上田氏と木村氏の叙述人称の比較
1－4－2　金田一京助の採録した鬼鹿毛物語の叙述人称
1－4－3　日本語の頻出の度合い
1－5　まとめ
2．凡例
3．日本語テキスト
4．アイヌ語テキスト
参考文献

1．解　　説

1－1　はじめに

本稿で紹介するアイヌ口承文芸のアイヌ語及び日本語による語りのテキストは、1997年４月25日、沙流郡平取町旭の上田トシ氏（1912～2005）のご自宅において、筆者が録音したものであり、同席者はいない。

この話を物語った後に上田氏は、「中川先生からもらったテープで覚えたシサㇺ　ウウェペケㇾ sisam uwepeker（和人の散文説話）だ」と述べられた。そこで、千葉大学教授の中川裕氏に確認

してみると、「この話は、トシさんのお姉さんの木村きみさん（1900～1988）から２回聞き取っている。トシさんに渡したのは、おそらく1981年９月19日に録音したもので、1986年に送っている。この話は「お銀小銀」「米福糠福」といった名前で、日本の昔話として広く知られている話であり、「学校」やら何やら出てくるという点についても、面白いことがわかる可能性がある」という主旨で伝承経路などについて教示を受けた。さらに「実は「和人の散文説話」というのは口承文芸学的に謎の領域なので、そこを突っ込んでみるということであれば、きみさんの資料を提供しますよ」という申し出をされたので、ありがたく、そのご厚意を受けることにした[1]。

本稿では、上田氏が語った和人の散文説話のアイヌ語原文対訳のほか、先行研究の諸問題について再検討を行うとともに、伝承の元になった木村氏の語りを比較する。そして、日本の昔話・伝説の類が和人からアイヌに伝承されることによって生じる変容について考察しその特徴を述べる。

１－２　先行研究における和人の散文説話の特徴について

１－２－１　久保寺逸彦を中心に

アイヌ口承文芸の一ジャンルである散文説話は、その語りの内容や形式の違いによって伝統的に次の四つに下位区分されてきた。

①　カムイの散文説話
②　人間の散文説話
③　和人の散文説話
④　パナンペ・ペナンペの散文説話

中川は、③の和人の散文説話の研究状況について、「和人に伝承されている昔話の類がアイヌ語で語られるようになったものであり、登場人物がアイヌ人になり代わっていても、「お稲荷さん」や「お伊勢参り」など、明らかに和人の伝承と見なされる要素が登場することが多く、語り手も和人のものとして意識しているものである。これについては、日本民話との対照が興味深いテーマとして考えられるにもかかわらず、金田一京助以降はほとんど研究が行われていないのが現状である」[2]と簡潔に述べている。このジャンルの研究が進められなかった大きな原因は、研究の素材となるアイヌ語原文による録音資料や文書資料が一部しか公開されていなかったこともあるが、日本からの伝承であるがためにアイヌの口承文芸研究上は軽視されてきたのかもしれない。比較的に研究の蓄積があるジャンルは②と④であり、①と③の口承文芸研究は積極的に取り組まれてはいなかった。

金田一のアイヌ口承文芸のジャンル区分は、彼の弟子である久保寺逸彦と知里真志保もほぼ同じ

---

[1] 以下、語り手以外を敬称略。中川の付した資料番号：K810919UP。このアイヌ語テキストは未公刊であるため、原文の引用については「1-4-3　日本語の頻出の度合い」の例として許可を得て一部を記載した。
[2] 中川が執筆担当した「散文説話」の項目、「アイヌ文学」『岩波講座日本文学史代17巻　口承文学2　アイヌ文学』岩波書店（1997）、p.p.248-249。

枠組みで受け継いでいる。知里の場合、③パナンペ・ペナンペの散文説話については原文対訳で詳しい注解を付けて公刊[3]したほかに、文学及び歌謡の起源と発展に関わるような資料収集[4]に力を注いで多くの業績を残している。ところが③の和人の散文説話については、三人称で語り進められる点と、この文芸ジャンルのアイヌ語呼称を三つ紹介している程度である。[5]

一方で久保寺は、和人の散文説話についての記述を比較的に多く残している。久保寺は1971年の没後に刊行された文献が多い。その中から和人の散文説話の特徴を述べている言説を文献の刊行順に抜き出してみる。

⑴「日本内地の昔話がアイヌに伝わって、アイヌ的要素が加わって伝承されたものである。三人称叙述形式をとり、多くの日本語がなまった形で入っている」[6]
⑵「常に、三人称叙述の形式をとる。(中略) この種の昔話には、それがさも和人の昔話だということを聴者に知らせでもするように、ほとんど不必要かと思われるまで、日本語がたくさん中に織り込まれているが、訛った形で使われていることは、古くからそのような形で伝承されて来たことを示すものであろう」[7]
⑶「アイヌの散文文学中、第三人称叙述形式をとるものの主なるものは、わずかに、Shisam-uwepeker「和人昔話」とPananpe-uwepeker「川下の者の昔話」等であるところを見れば、この種のものは、第一人称叙述の散文文学より遅れて発達したと見做すべきではないか」[8]

以上の全てに一貫して「三人称の叙述形式」という特徴を述べ、それぞれに別の特徴も述べている。⑴と⑵では、たくさんの日本語が訛った形で使われている点、⑶ではアイヌ文学の発達に関する点である。この「文学の発達」については、本稿では取り上げないことにして、久保寺が和人の散文説話の特徴として述べたことをまとめると、「たくさんの日本語を使う」「日本語を訛った形で使う」「第三人称で叙述する」という３点をあげることができる

日本語の使用について久保寺は、上記⑵の記述のすぐ後に下記の用例をあげて日本語を下線で示している。

<u>Hatango</u> <u>tono</u> an hine shiran, nishpa ne <u>tono</u> ne wa, ashur-ash kor an kur ne an ruwe-ne, shine matnepo kor ne oka ruwe-ne aike, shinean-to ta <u>tapeto-tono</u> ek hine,nea <u>hatango</u> <u>tono</u> orta <u>yanto</u>-ne ruwe-ne.

---

[3] 知里真志保『アイヌ民譚集』郷土研究社 (1937)。
[4] 祈りことば、会見の辞、巫女の託宣、なぞなぞ、ことば遊びなどの採録。
[5] 知里真志保『アイヌ文学』元々社 (1955)、p.p.168-170。 sisam-uwepeker、sam-uwepeker、tono-uwepeker の三つの呼称。萩中美枝『アイヌの文学　ユーカㇻへの招待』北海道出版企画センター (1980)、p.133、萩中は「シサㇺトゥイタㇰ shisam-tuytak」の呼称をあげて「和人物語」及び「和人伝説」と訳し、散文説話のジャンル区分では「その他の物語」に含めて下位分類している。
[6] 久保寺逸彦「文学 (アイヌの項目)」『ブリタニカ国際大百科事典１』ティビーエス・ブリタニカ (1972)。
[7] 久保寺逸彦『アイヌの文学』岩波書店 (1977、１月)。
[8] 久保寺逸彦『アイヌ叙事詩　神謡・聖伝の研究』岩波書店 (1977、２月)。

しかし、このわずか３行のアイヌ語例文を見ても、伝統的なアイヌ文化に存在しない概念（職業、身分）を示す「宿屋」「旅籠屋」「殿」「旅人」[9] などという名詞がいくつかあるだけで「ほとんど不必要」という程の頻出ではない。この例文からは、日本語を用いるのは名詞だけであることが読み取れる。

この例文をもとにした「訛り」については、「反物行商人（アイヌ語で tapeto-tono「旅人殿」の訛り」のほか、下線で示された、旅籠（はたご）を表す hatango、宿（やど）を表す yantoなどをみても、アイヌ語の語り手が日本語を話すときの通常の発音であり、これを「訛り」と認定することやそれを根拠に「古い時代」[10] から伝承されたとする定義の曖昧さについても疑問が残る。

三人称の叙述形式については、カムイの散文説話と人間の散文説話は主人公の叙述が一人称（中川によれば四人称）[11] で語られ、和人の散文説話とパナンペ・ペナンペの散文説話はともに三人称で語られることが通説になっている。パナンペ・ペナンペの散文説話については、公刊された多くの文献でアイヌ語原文により三人称の叙述形式を確認できるが、和人の散文説話はそこまでの検証はされていないようである。[12]

従来の研究でいわれてきた和人の散文説話の特徴と久保寺が⑴で述べた「アイヌ的要素」というものが指し示すものを具体的に確認していくことが必要である。

１－２－２　最新の研究成果

和人の散文説話の研究資料が乏しいなか、2001年に千葉大学文学部日本文化学科の遠藤志保が話の導入部から結末までのモチーフ比較という、新たな視点による論文「和人の散文説話の特徴－『鬼鹿毛』と小栗照手譚の比較から－」を書いている[13]。遠藤は金田一の「鬼鹿毛(おにかけ)物語」[14] とこの物語の元となった日本の伝説「小栗判官(おぐりはんがん)」を比較分析し、和人の散文説話の特徴として次の六つの点を指摘した。

⑴　和人の伝える説話の筋を保とうとする。

---

[9] このことばはアイヌ語に置き換えられそうであるが、アイヌと和人の旅の目的の違いや、「殿」ということばが接尾しているためにそのまま日本語を用いているのかもしれない。

[10] 久保寺が述べる「古い時代」がいつのことを指しているのかは不明。

[11] 金田一京助、久保寺逸彦、知里真志保らが一人称という説を提示して以来、現在もそれを前提とした論考が見受けられる。しかし、その後は田村すず子が物語全体を一つの引用文として「引用文中の一人称」という説を、中川裕が叙述者の人称を不定化する「四人称」という説を述べている。筆者も中川説に賛同するものであるが、本稿では論を進めるにあたって従来の研究上の用語「一人称」をあえて用いる。

[12] 日本昔話の短編で「猿の生肝」と「隣の爺」タイプのアイヌ語原文は、田村すず子『アイヌ語音声資料3』早稲田大学語学教育研究所（1986）にある。他に、日本昔話の「猿蟹合戦」の戦闘シーンがカムイユカㇻで語られた萱野茂編「イワンレクドㇱペ」所収『萱野茂のアイヌ神話集成　第３巻　カムイユカㇻ編Ⅲ』平凡社（1998）があることを財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構職員の高橋規から教示を受けた。この物語は動物と道具が登場人物であり、カムイの話として神謡化された可能性がある。北海道に原生していない猿は「六つ首の化け物」に変化しており、アイヌに馴染みのないものが別の存在に置き換えられる例の一つである。同様の話は、前掲書、久保寺逸彦（1977）の「神謡４」p.p.55-58、「神謡5」p.p.59-60にあることをモニターから教示された。そこでの猿はPoro nitne-kamui（大魔神）やIwan-rekut-ushpe（六つの喉くびある化物）として語られている。

[13] 遠藤志保「和人の散文説話の特徴－『鬼鹿毛』と小栗照手譚の比較から－」『文学部の新しい波（2001年度優秀卒業論文集）』千葉大学文学部（2002）。

⑵　アイヌの口承文学で使われるモチーフは、和人の散文説話でも使われる。
⑶　登場人物の感情ならびに行動は、人間の散文説話のそれである。
⑷　和人の言葉はできうる限り残そうとする。
⑸　和人の散文説話特有の表現、常套表現がある。
⑹　和人の散文説話特有の観念がある。

さらに遠藤は「総括」の中で次のように論を結んでいる。

「和人の散文説話は、和人の伝える説話の筋を保ちつつ、アイヌの口承文学のモチーフをも取りこんで作られる。登場人物の行動等では、人間の散文説話の影響を強く受けている。しかし、和人の散文説話は人間の散文説話の単なる合作ではなく、和人の散文説話独自の表現や観念をも、その中に内包している物語なのである」

日本語訳による限られた資料による比較分析であるが、和人の散文説話の性格と傾向を丹念に抽出することで、遠藤はこの分野の研究を発展させている。しかし、日本の伝説や昔話の方は一次資料として扱えるが、アイヌ語から翻訳された話は必ず変質する箇所が生じるため、それは二次的、三次的な資料として捉えなければいけない[15]。

１－３　お銀小銀と本テキストの比較

本稿の和人の散文説話の元となった日本昔話は、「お銀小銀」「お月お星」「米福粟福」などと同

[14] 金田一京助『アイヌ叙事詩　ユーカラ概説』平凡社東洋文庫 (1931)、p.p.66-77。この物語のアイヌ語原文資料 (1925年筆録) は、北海道立図書館所蔵のマイクロフィルム「金田一京助ユーカラ・ノート」(請求番号：HM418)。鍋沢タイノアシ氏はそれより先の1914年に同話を語っている同資料 (請求番号：HM417)。なお、コポアヌ氏は1934年に「鬼鹿毛物語」を録音させている (北海道立図書館での複製資料の請求番号：4496のテープ番号38～39)。内容に相違点が見られ、比較資料として貴重である。他のストーリーの和人の散文説話は、北海道教育委員会による現地調査で採録された音声資料 (整理番号：52・K・9、52・K・26) に３編。金田一京助『アイヌ叙事詩　ユーカラ集Ⅰ〝PON OINA〞(小伝)』三省堂 (1959) の「「金成まつユーカラ集」目録」によると金成マツノート66冊目に1編。「金田一京助ユーカラ・ノート」に17編。このように和人の散文説話のアイヌ語原文の音声や文書の資料は20編以上あることは確実である。なお、筆者が「おにかけ」とルビをふった理由を以下に記す。「鬼鹿毛」は一般的に「おにかげ」と読まれることが多く、久保寺は『アイヌの文学』で「オニカンギ」とルビをつけている。しかし、金田一はタイノアシ氏から筆録した後で「オニカケ」とメモしており、コポアヌ氏もタイノアシ氏も「onikake (オニカケ)」と語っている。また、「鬼鹿毛物語」では若殿が人食い馬に対して「鬼鹿毛、鬼鹿毛、私は鹿毛殿で、お前は鬼鹿毛、同名だから、これから友達にならう (下略)」という文句がある。「金田一京助ユーカラ・ノート」に筆録されたコポアヌ氏とタイノアシ氏のアイヌ語では、両氏共に人食い馬を「onikake (オニカケ)」、若殿を「kaken tono (カケントノ)」と語っており、金田一自身のメモにも「カケントノ、オニカケ」とカタカナで表記し、「共ニ　カケ　デ同名」と記している。「kake (カケ)」いう二音の重なり程度で同名と述べられる点などは、アイヌの命名についての重要な情報である。「鹿毛」を「カゲ」や「カンギ」と呼称することは、同名だから友になるというモチーフを崩す恐れもあるので、筆者は原文に合わせて「おにかけ」とルビを振る。

[15] 金田一は「鬼鹿毛物語」の前置きで「今年七十を超した紫雲古津の老婆コポアヌの傳承である」と記しているが、「鬼鹿毛と若殿の名前が同名であるから友達になる」というモチーフはコポアヌ氏の語りには全くなく、タイノアシ氏の語ったバージョンの中にある。アイヌ語原文で比較すると、「鬼鹿毛物語」はコポアヌ氏の語りを主体としているが、タイノアシ氏の語りの面白さも取り込んで混交しているのがわかる。

じく家族の葛藤を物語っている。本テキストと最もプロットが近いものとして、「お銀小銀」（日本昔話大成話型索引番号207）[16] がある[17]。千葉大学教授の三浦佑之があらすじをわかりやすく述べているので引用する。

「「お銀小銀」という話型では、継母が継子のお銀を殺そうとしてさまざまな悪巧みを考えると、そのたびに腹違いの妹小銀が察知して姉の危機を救い、最後は父と姉妹で幸せになるというふうに語られていて、主人公はやさしさと知恵をもった妹の小銀のほうだと思わせるような継子いじめ譚（下略）」[18]

そこで、これ以降は、本テキストの元になった日本の説話を「お銀小銀」と呼んで考察する。

１－３－１　モチーフの変容

本テキストとお銀小銀のモチーフの相違点として、本テキストでは旅に出た父親が盲目となる場面は語られていない一方で、その父親が語りおさめの部分で根性の悪い後妻を叩き殺す場面が付け加えられているという二点が大きい。

お銀小銀の話は全国的に分布しており、たくさんの類話（バージョン）があり、結末については継母が罰を受けてモグラやヘビや鬼に化身して人間以外の存在になって地中に潜ったり、家出していなくなったりするなどと、悪巧みを働いた後妻がなんらかの形で姿を消すバリエーションが多い[19]。相反して本テキストの結末では、父親自身がその後妻を叩き殺すという厳しい罰を与えており、後妻を生かしてはおかない[20]。このように父親が悪いことをした家族の一員を殺すというモチーフは人間の散文説話ではまったく珍しくない。久保寺のことばを借りれば、お銀小銀が「アイヌ化」[21] している結末といえる。

この話の中で重要な立場にある「援助者」について比べると、本テキストで顕著に変容した現象をみることができる。この物語では、妹（小銀）が実母に従わないで腹違いの姉（お銀）の窮地を熱心に助けている。日本昔話の研究では、妹の援助者としての行動原理はなにも説明されていないために、この点が謎とされてきた。山本則之は、お銀小銀についての将来的な課題として以下のように述べている[22]。

「昔話においてどうして継子は憎まれ、いじめられるのか。話の中でその理由が説かれることは

---

16 関敬吾『日本昔話大成』全11巻、角川書店（1978～80）。
17 久保寺逸彦『アイヌの昔話』三弥井書店（1971）の「50 股裂きにされた商人の妻」では、姉妹ではなく兄弟の設定になり、本テキストでの母の殺人未遂の場面と同じモチーフで語られている。
18 三浦佑之「継子譚と家族」『群像』45-12、講談社（1990）。
19 例外的に、後妻が井戸のに落ちて死んだり、後妻が改心したりして家族全員で仲良く暮らしたという結末もある。
20 稲田浩二・小澤俊夫編『日本昔話通巻第４巻　宮城』同朋社（1982）。同『第３巻　岩手』（1985）。日本の説話や昔話には、悪者が罰せられて動物に変身するというモチーフは多いが、人間の散文説話にはそれがないことも大きな違いである。この特徴については、筆者の検証が不十分なので注記にとどめておく。
21 前掲書、久保寺逸彦（1977）、p.191。
22 野村純一編『別冊國文學　昔話・伝説必携』學燈社（1991）、p.16。

ついにない。また、本話の継子を積極的に助け幸せに至る実子はどこから来たのか。その出生の解明が待たれる。」

ところが本テキストの方では、妹が援助者として振る舞うように操作していた真の援助者が姉の亡くなった実母（先妻）であることや、妹が自分の母（後妻）の悪巧みに気づく理由も明らかにされている。また、それに付随して姉の実母が自分自身の死因と特別な能力を得ることが出来た事情までも語っていることは、日本の説話であるお銀小銀との大きな違いである。

伝統的なアイヌの他界観では、普通の人間が亡くなれば先祖の国（あの世）へ行くことになり、そこから現世（この世）で生きている誰かを見守るということはない[23]。それはこの世に生きる人自身の憑き神とカムイ（神）の役目である。そこで、本テキストでは亡くなった姉の実母が太陽の神に惚れられたために魂を奪われて神の国へ行き、その妻になると同時に神という存在になり、我が子であるお銀を救うことが可能になった、というように驚くべき合理的な整合性を持った説明がされているのである。このようにアイヌの他界観が反映した語りになっている点は、お銀小銀が人間の散文説話の構成に近づいていることの証ともいえる。

またその他の場面でも同じような現象はみられる。お銀小銀では、お銀が生き埋めにされて越年しても生存していると語られることも多いが、現実にはありえない。そこで本テキストでは、お銀が実母であった女神の治療によって生き返るというモチーフが付加される。そこでは、姉を埋めたところに大きな石を乗せて置く埋葬方法やその石を取り除く女神（先妻）の援助という、お銀小銀で語られないモチーフが加わっている。

本テキストでみられるように、和人の散文説話ではお銀小銀がアイヌに伝承されて再話され続けてきた中で、アイヌの習俗・信仰からはとうてい受け入れられないモチーフは変化し、日本昔話の非現実的なモチーフはアイヌの日常の世界で納得のいく現実的な説明が加えられる傾向が読み取れる[24]。

この点について、既に遠藤が「主人公がアイヌでなく和人であっても人間の散文説話と同様の感情を持ち、行動する。話の筋自体は和人が伝える通りでも、そこで登場人物がおこす行動は、人間の散文説話のそれに変化している」「もとの和人が伝える説話にあるモチーフ・登場人物でも、人間の散文説話の理屈に反するものは、別のものに変えられ、理屈に反しないようにされる。ただし、もとの和人の説話の筋を変えない」[25]、と指摘していることと合致している。

ただし、遠藤が「アイヌの口承文芸では食事の場面がよく出るが、和人の散文説話ではほとんど出てこない」[26] と述べていることに相反して、本テキストでは詳細な食事風景とまでは言えないけ

---

[23] 1998年7月18日に新ひだか町の故葛野辰次郎氏（1910～2002）からアイヌの他界感について調査した際、葛野氏は「亡くなった人に対して、この世にいる者が守ってくれと頼むのはおかしな話だ」と述べた。人間の散文説話の中には、あの世に行かずに幽霊となった母親が自分の赤子を養育し、その子の親代わりになる人を見つけるとあの世へ行くという特異な話もあるが、その母親があの世から赤子を守護することはない。

[24] この点を和人の散文説話の特徴と明言するためには、もっと多くのデータをみる必要がある。

[25] 前掲書、遠藤志保（2002）、p.156、p.162。

[26] 前掲書、遠藤志保（2002）、p.176。

れども、登場人物が食事をする場面が頻繁に語られている。例えば、自宅や学校や山中での食事風景である。これは本テキストが、後妻の出した毒入りの朝食や弁当を食べないが、援助者である学校の先生や宿屋の主人の食事はいただく、というように「食事」という行為が物語を構成する一つのキーワードになっているからであろう。

１－３－２　固有人名の消失

モチーフ以外で変容した興味深い現象がある。お銀小銀のような継子譚では、登場人物の姉妹の名前は、「お月・お星」「朝日・夕日」「お杉・お玉」「お糸・唐糸」「お吉・お玉」「おらんこ・からんこ」、等々と地域が違っても、説話の登場人物には固有の人名が必ず付けられて語られる。他のさまざまな本格的日本昔話でも、主要な登場人物に名前を付けて語るのが一般的である。

しかし、本テキストでも明らかなように、アイヌ語で再話された際に姉妹の人物名は消えて、その代わりに「姉」や「娘たち」を意味するアイヌ語の親族名称と動詞に付く人称接辞で区別して語る、という変化を起こしている。これは本テキストの元となった木村氏の語りでも同じである。このように登場人物の固有人名が出ないのは、通常の人間の散文説話と同じ特徴を持っている[27]。この点は、先行研究でも指摘されたことはなかった。

１－３－３　話の長編化

本格昔話であるお銀小銀の話は、各地の語り手自身のことばで記されたものを見ても、数ページで書き終えられる短いものである。それをゆっくり読んだとしても数分で読み終えてしまう。しかし、それを和人の散文説話としてアイヌ語で再話されると、登場人物の様々な行動について、そのいきさつを明かす場面が加わり、そのいきさつの説明は他の場面でも繰り返して述べられる。つまり、登場人物Ａに問われれば主人公的な立場の妹が事情を説明し、別のＢに問われれば再び事情を話し、更に語りおさめのシーンでも念をおすように子孫あるいは聞き手に対して、物語のいきさつと教訓めいたことを述べて語り納めるという、人間の散文説話と同じ語りの構成になっている[28]。話中の出来事の事情説明がより詳しくなるために、お銀小銀がアイヌ語で再話されると口演時間が数倍に長くなるという現象が起きている[29]。なぜ、和人の散文説話ではいろいろなモチーフに詳しい説明を付けられるのか、という点は「１－５　まとめ」で後述したい。

---

[27] 人間の散文説話では、イクレスイェやシㇼマオッテのほか、いくつかの人物名が登場するものもある。それぞれが強い個性を持っているが、この散文説話に登場する人物についての研究も遅れている。筆者は、人間の散文説話に登場するヒーロー的立場の人物に対して名前の付加が期待される場合と実際に存在した人物がモデルになっている場合があると推測する。出現した人名は人格と能力を表しており、その話が現代風にいえば「アクションもの」なのか「ホームドラマ」なのであるのかを聞き手に対して予め想起させる効力があると考える。

[28] 小澤俊夫『昔話入門』ぎょうせい（1997）、p.p.71-72。昔話でも同じ場面になれば同じことばを繰り返すということはあるが、アイヌではそのくり返し文がより丁寧であり、長さも著しく異なるのである。この構成は、アイヌ口承文芸では散文説話だけでなく神謡にもみられる。

[29] わずか数分で読み終えるお銀小銀の話が、和人の散文説話として語られた本テキストでは41分以上に長くなっている。

1－4　和人の散文説話の叙述人称と日本語の頻出について

1－4－1　上田氏と木村氏の叙述人称の比較

上田氏の語りと木村氏のアイヌ語原文のテキストにより、和人の散文説話の特徴とされてきた三人称叙述の形式と日本語の頻出のあり方をみてみる。

まず、物語叙述の人称の問題であるが、両氏共に三人称で物語り始めているが、物語中のところどころで登場人物父親や小銀の一人称叙述に切り替わっている。ともに三人称の叙述形式で語るという従来から述べられてきた特徴から外れている。叙述の人称が変化するタイミングを較べると、両氏の語りで違いが見られる。

木村氏のテキストでは、妹が心に思った部分や話をする文句などは、彼女の第一人称接辞を用いて語るのであるが、その文句が終わった後も、そのまま妹の第一人称接辞を引きづる傾向が見られる。つまり、妹の発する文句と文句の間にある文中の動詞や名詞に、妹の叙述としての人称接辞が付いているのである。それがまた誰か他の登場人物の文句になった際に再び、三人称による叙述形式に復帰する。木村氏は物語全てを厳密に三人称で語ってはいない。叙述者の人称のブレは規則性がなく自由奔放のようにみえる。

その一方で上田氏の語りは、人間の散文説話に見られるのと同じような形式で叙述者が変化している。三人称で語り始められているが[30]、父親が旅に出てから妹の活躍場面が多くなる直前、チャンネルを切り替えるかのように「オラノ、ネ、イマタㇰネ　マッカチ　オラノ　イソイタㇰ orano ne imatakne matkaci orano isoytak（それからその妹の方の娘が語ります）」と聞き手に対して、妹の一人称叙述に変化することを宣言している。

このような違いはあるが、両氏が共に同じタイミングで父親の一人称に変化する箇所がある。それは物語後半で父親が姉妹をタンスに隠れさせて、父親と後妻が対決する場面の寸前である。この対決場面では隠れている姉妹が登場することがないため、三人称叙述を選択しない限りは、父親の一人称で語られる。上田氏の場合は、父親の一人称叙述に変化する直前に父親の一人称に切り替えることを宣言してから変化している。なお、両氏の語りの中で姉が一人称で語る場面がはないのは、姉は常に被害者として受け身の立場であり、真のいきさつを知っている妹が主人公的な立場で物語を進行させているからであると推察する。

1980～90年代に採録された和人の散文説話では、二人の語り手の事例にすぎないが、必ずしも三人称叙述で語り通してはいないことが確認できた[31]。それでは従来から言われてきた和人の散文説話の特徴は正しくないのだろうか。もっと古い時期のアイヌ語原文テキストを見ることにする[32]。

30　父親が旅に出る直前の短い範囲で父親の一人称の叙述があるが、上田氏の語りの特徴からちょっとしたはずみであると筆者は解釈した。

31　前掲書、遠藤志保（2002）、p.144によると、中川が1981年に採録した和人の散文説話「御神酒徳利」も一人称叙述である。

32　林誠「北海道立図書館所蔵マイクロフィルム「金田一京助採録ユーカラ・ノート」の細目次」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要　第13号』北海道立アイヌ民族文化研究センター（2007）によると、「書き出し」という項目に「Sam uwepekere」「Shisam uwepekere」「Pishun machiyakot tono an」「日本昔話ノアイヌ語譚」などと記載しているのが和人の散文説話である。請求番号：HM417（ノート⑶）、HM418（ノート⑵⑷⑸）、HM419（ノート⑷）、HM423（ノート⑺）。

１－４－２　金田一京助の採録した鬼鹿毛物語の叙述人称

金田一が1907～1935年にかけて筆録したノートは北海道立図書館に「金田一京助採録ユーカラ・ノート」として、マイクロフィルムで公開されている。この資料の中に平取町の鍋沢コポアヌ氏とその息子である鍋沢タイノアシ氏[33]などによる和人の散文説話17編のアイヌ語原文がローマ字で筆録されている。遠藤が研究の題材にした「鬼鹿毛物語」のアイヌ語原文がこの中にある[34]。これらを筆者が概観したところ、全て三人称による叙述形式で筆録されていた。

金田一が「鬼鹿毛物語」で日本語訳した語りおさめのことばは「生みの母は子が何處に居ても、えらい身分になったから、世間の人から高く見上げられ、自分も顔をあげてくらした」である。その文句に対応するアイヌ語原文[35]は以下の通りである。

unuhu neyakka rik ta rik ta inkara／poho neita an yakka nishipanehi／eshiokunure kusu rik ta rik ta inkar／ruwe ne. sekor

日本語訳とアイヌ語の語りは三人称の叙述形式で語り終えているのがわかる。同じ「鬼鹿毛物語」を語ったタイノアシ氏のアイヌ語原文は以下の通りである。意味の不明確な単語もあるが日本語に意訳すれば「オニカケから若い旦那さんが助けられたのである。遠くにも評判が立つ者になったと言われた」という意味になろう。

oni kake orowa pon tono ashiknu[36]／ruwene. tui ma eunno ashuru／ash kunne ruwene kusu aye.

この文の最後のことば aye は、形だけをみると上田氏と木村氏も同じである。しかし、両氏が登場人物の第一人称接辞として用いているのに対して、タイノアシ氏は人物を不定にするための人称接辞として用いていることは、語り終える直前まで三人称の叙述であったことからわかる。日本語訳としては受動態の「言われた」と訳すべきものである。コポアヌ氏が語ったお銀小銀以外の和人の散文説話（資料：HM418）を見ると、タイノアシ氏と同じく最後の一言だけを不定人称で語り終えている。

onne pakno／nep aeshirkirap ka somo ki ruwe ne／akusu aye na

和人の散文説話の語り終え方は、人称接辞が三人称か不定人称の形式をとり、物語中の動詞に付

33 両氏共に同姓なので以下は名前で区別する。両氏の生没年は不明。
34 北海道立図書館所蔵マイクロフィルム「金田一京助採録ユーカラ・ノート」請求番号：HM418（ノート番号(5)）
35 北海道立図書館所蔵マイクロフィルム「金田一京助採録ユーカラ・ノート」請求番号：HM417（ノート番号(3)）
36 shikunu（生きる）は自動詞なので、語頭に人称接辞と思われる「a」があることの解釈が難しい。本来は -re が接尾した他動詞かもしれない。

いている人称接辞も全て受動態である。

金田一らが採録調査した1900年代初頭は、和人の散文説話（その物語本文）は三人称で語るものであったが、その後の世代が語った散文説話における叙述する人称の変化は、時代の変遷が影響しているようである。例えば上田氏の場合は、三人称叙述形式で語るのが特徴とされているペナンペ・パナンペの散文説話を録音テープで聞き覚えても、それを再話すると常に第一人称叙述で物語るのであった。上田氏と木村氏の世代の語り手による和人の散文説話の口演は、三人称で語り始めるが途中から一人称が混在するという語り方に変化していたのである。

１－４－３　日本語の頻出の度合い

次に、日本語の頻出度合いについて比較すると、木村氏と上田氏に大きな違いがみられる。木村氏のアイヌ語原文資料は、久保寺が「日本語がたくさん中に織り込まれている」と述べているとおり、日本語だけで語る箇所がかなりある。物語中の会話の文句を日本語で語る傾向も見られるが、これも叙述人称と同様に登場人物の文句が終わった後も日本語を引きずるかのように文単位の日本語で語っている。下記文例の大文字表記が日本語である。

a=unuhu eun ene hawean hi TOKYO un a=suci utar eun arparusuy=an kusu ZUUBAKO HUTACI IPPAINI II GOCCO CIKUTTE IRETE KURE”　sekor kane a=ye a=unu ki akusu MOO MUSUME HITORINA MON DAKARA YUUTO MAMANISITE GOCCO CIKUTTE…
(私の母へこのように言った。「東京にいる親戚のお婆さんたちへ行ってみたいから、重箱二ついっぱいに美味しいご馳走をつくってくれ」と私が言った。私の母はすると、もう、娘一人なもんだから、言うとおりにしてご馳走をつくって…)[37]

上田氏は木村氏の語った録音テープで聞き覚えたのであるが、文単位の日本語をまったく用いないで再話している。単語としては、学校、先生、押し入れ、布団、弁当など、アイヌの伝統社会には存在しない職業や品物などの概念を表す名詞だけである。さらに木村氏が日本語で「大工」や「花屋」と語ったことばを、上田氏は「はこ　カㇻ　シサㇺ HAKO kar sisam（箱を作る和人)」とアイヌ語に置き換え、「花屋」の箇所は「ノンノ　ピイェヘ　カ　ポロンノ　アホㇰ nonno piyehe ka poronno a=hok（花の種もたくさん私が買った)」と購入先をアイヌ語で述べて日本語を減らしている。

従来の研究で用いられていた「金田一京助採録ユーカラ・ノート」には、コポアヌ氏とタイノアシ氏の語りのほかに同郷の鍋沢ユキ氏（1900～1957)[38] の語った和人の散文説話もあるので概観し

---

37 アイヌ語原文資料は注１。訳は筆者。

38 金田一氏が「アイヌのホメロス」と讃えた平取町紫雲古津の鍋沢ワカルパ氏（1863～1913）の娘であり、金田一家に在宅した1915年代に口承文芸を筆録させた。北海道立図書館所蔵マイクロフィルム「金田一京助採録ユーカラ・ノート」請求番号：HM418（ノート⑷)。

たが、上田氏と同様に日本人の職業や身分、道具などの名詞だけが日本語で語られており、その頻出度もほとんど同じであった。

１－５　まとめ

和人の散文説話というジャンルの口承文芸について、アイヌ語原文から検証したことと新たに判明した特徴をあらためてまとめる。

① 叙述形式は三人称であることを確認した。
従来の研究が資料として用いてきた金田一京助の筆録ノートでは、物語の叙述形式は三人称である。それが一人称を混在して語るようになったのは最近のことであるが、変容する前の名残として語り初めは三人称で叙述される。

② 日本語の頻出は名詞のみであることを確認した。
従来の研究で用いられた資料を見る限り、日本語の使用はアイヌに存在しない職業や道具などの概念を表す名詞だけである。文単位で日本語が使われるのは最近のことであり、個人差による現象である。

③ 日本昔話が和人の散文説話になると、主な登場人物は固有人名を親族名称で表現する。
従来の研究で用いられたテキスト（1910～1930年代）も近年の採録テキスト（1980～90年代）も同様に、家族関係は、姉、妹[39]、母、父などのアイヌ語の親族名称で語り、家族以外の登場人物は、殿、親方、足軽、山伏などの日本語による身分や職業を表すことばで区別する。

④ 日本昔話が和人の散文説話になると、話が長編になる。
アイヌの習俗・信仰などで理屈に合わない部分は省略されることもあるが[40]、主人公的な存在である妹の行動原理がカムイの意志によるものであるという合理的で詳細な説明が加えられる。その説明が物語中で何度か繰り返される形式は、人間の散文説話と同様である。

⑤ 日本昔話が和人の散文説話になると、アイヌの日常生活に即した現実的な内容になる。
要因は④と重なるが例をあげると、お銀小銀では水も食料もほとんどない地中で越年するお銀であるが、和人の散文説話でお銀は死んでしまい、その復活には人間の力を凌駕したカムイの援助と薬による“治療”を必要とすることが具体的に説明される[41]。

上記④⑤の神は、日本の神ではなく、アイヌが信じるカムイの存在[42]に徐々に移行していること

---

[39] 本テキストでは、妹の第一人称で叙述する範囲が多いのでこの単語は現れていない。
[40] 前掲書、遠藤（2002）で指摘されている。
[41] カムイという存在は、伝統的文化で育ったアイヌにとっては日常を過ごす上で実際に存在しているものとして信じられている。また、先妻が早死にした原因などは、1980年代までは鵡川筋や沙流川筋のアイヌの日常生活で実際に信じられていたことである。1960年生まれの筆者は「あの人はめんこくて優しかったから神さんにとられたんだべ」と年長者が言うのをよく聞いていた。大事な人を失った悲しみを神に選ばれたという"誇り"に代える効果があり、単なる気休めのことばではない。

が、日本の「クスリ」とアイヌの治療法の一つである「フッサカラ（病人にフッフッと息を吹きかける所作）」の併用があることで推察できる。お銀小銀の方では、父親の留守の理由が「伊勢参り」などと語られる場合があるほかに、神仏に関する話題はほとんどない。

その一方、本テキストでは、導入部のお銀の誕生から、先妻の死因、お銀の姉救助の動機、生き埋めにされたお銀救出活動、姉妹の嫁入り時のための財産（衣服、靴など）供与、関所と思われる危険な場所の通過など、物語全体にカムイの思わくが絡んでいるために、カムイの存在なしにストーリーは成り立たなくなっている。和人の説話にあるモチーフで、アイヌの世界に受け入れがたい理屈に反する部分は、カムイをかかわらせて説明することによってそのモチーフが話中に保たれている。

久保寺の述べていた「アイヌ的要素」とは、話中に取り込んで語る「アイヌの伝統的な習慣」もその一つであるが、もっとも大きな要素は「カムイの関与」であり、その語られ方であると筆者は考える[43]。また、和人の散文説話を区分する基準については、従来の研究で述べられてきた特徴に従うことが妥当であることを確認した。

本稿の作成にあたって、この物語を伝承し記録を残していただいた上田トシ氏と木村キミ氏に対して心からの感謝を捧げ、ご姉妹のご冥福をお祈りいたします。

千葉大学文学部教授の中川裕氏と様似町在住の大野徹人氏からは資料提供などのご協力を得ました。また、時間をかけて原稿を査読していただいた諸先生からは、貴重なご意見を多数受けました。誤記等のご指摘については省略させていただきますが、重要な点については注記しました。

お世話になった方々に心から感謝いたします。

2．凡　　例

⑴　本文の構成とテキスト記載の書式

上田氏が語った日本語テキストを先に記し、その後にアイヌ語テキストを記している。アイヌ語テキストは二段組みとして、左側のアイヌ語はカタカナとローマ字を併記し、右側には筆者による日本語訳を記した。注記は各ページの文末に記した。注記で上田氏と木村氏の語りを比較する場合、木村氏の語りを「原典」ということばで指し示す。

⑵　日本語テキストは、上田トシ氏の語り口をできるだけ忠実に文字化したが長音の箇所は示さない。また、言いさしや言いよどみで意味の取りにくい箇所は、煩雑さを避けるために省略した。省

---

[42] 北海道立図書館所蔵マイクロフィルム「金田一京助採録ユーカラ・ノート」請求番号：HM423（ノート⑺）に「Shisam Uwepeker "Sumino tawarano koya"」（筆者の訳「和人の散文説話"炭の俵の小屋」）という和人の散文説話（鍋沢コポアヌ口述、1919年12月14日筆録）があり、「asakusa kannonsama kamuy」（筆者の訳「浅草観音様の神」）と kamuy を付けた表現があるが、このような和人の散文説話で表現する kamuy はアイヌのものとは異なっているようであり、この分析も今後の課題である。

[43] 日本の昔話や伝説をアイヌ語で再話した場合、単純にアイヌ語に直訳されただけのものから人間の散文説話に限りなく近づいたものがある。下位区分された和人の散文説話のいる位置はとても幅広いようである。話の舞台を和人からアイヌの世界に置き換えて人間の散文説話に移行したものもあると推測するが、より多くの原文資料の検討が必要であり、今後の課題とする。

いた箇所が比較的に広いところは注記した。日本語北海道方言でわかりにくい表現及びアイヌ語が出現した場合は（　）内にその意味を記した。

⑶　アイヌ語のカタカナとローマ字の表記

基本的に社団法人北海道ウタリ協会（現：社団法人北海道アイヌ協会）によるアイヌ語の入門書『アコㇿ　イタㇰ AKOR ITAK』(1994年）の表記法に準じている。カタカナ表記では、言いよどみや長音を示す「ー」などは省いた。実際には「ピリーカ」と発声している箇所を「ピㇼカ」で統一している。話中の日本語はひらがなで記した。アイヌ語のローマ字表記では、言いよどみと判断した音は（　）で括り、話中の日本語は大文字で記した。

⑷音と意味の解釈が困難な箇所

カタカナ表記では（？）を、ローマ字表記では「??」を付した。語句の言いかけや言い誤りなどで、本来言おうとした語句を推測できるところはそれを注記に記した。

３．日本語テキスト

カムイ　トノ（立派な旦那さん)、なんも物に不自由ない
金も不自由ない、なんも不自由ないで
生活しているうちに　なんにも困るものないけども
子供のないのだけ困って、子供欲しくて欲しくて、もう毎朝
朝起きれば子供欲しいちって　おてんとうさんに
お祈りしてお祈りして、その奥さんも祈る。
自分もお祈りしていていて、そのうちに奥さん
お腹大きくなって、もう喜んで喜んでいるうちに
奥さん、子供出来たけ、きれいな女の子生まれたんで
もう喜んで喜んで子供育てて、二人して
子育て喜んでいるうちにちょっとした病気で
奥さんが亡くなってしまったあとに
その旦那(たんな)さんが子育てしているうちに子供また
その大きくなったんだけども、他の人見るのに
「あれだけの立派な旦那さんであっても
あってから　奥さんが亡くなったからって
１人で子育てしているのも　もう見るに見かねる。
大変気の毒だから、いい奥さん見つけて一緒になったらいい」って
いうのでいい奥さん、また見つけてもらって、一緒になって
子供も可愛がってくれて、一緒に子供育てているうちに
また後から来たおっかさんも、奥さんもまた子供出来たけ
また女の子出来て、もう喜んで喜んでその旦那さんは
二人の女の子出来たと思って喜んで喜んでいるうちに

もう学校へも行くようになったりしたけその旦那が言うのには
「これだけ、子供らも大きくなったから自分は年いったら
もう神さんのお参りに行かれないから今のうち
神さん参りに行くから子供ら見ていてくれるか」ったら
「子供ら見ていく」っていうことで旦那さんが子供、
子供らおいて「よく守ってくれ」っていうこと
くれぐれも頼んで出て行ってしまった。
後になったけ、こんどその妹の方が言うのには[44]
父親が自分の親に「子供らに大事にしてくれ」っていうこと言って
留守空けて、神さん参りに行ってしまっていなかったけ
こんど自分の姉さ、いじめるやら、なにやらしているのだけでも
自分、面白くない思いしていたのにある朝になったら
学校へ行くようになって弁当作りしてもらうようになったり
なんかするくらいになってるうちに朝になったら
もう必ず自分さ先に起こして後さ、姉さ起こしていたの
いたもんだったのにある朝にまだ自分さ[45]先に起こして
したけ、お膳二つこしらえて置いてあるのに
姉のお膳になにか食べ物さ入れたようなふう見えたから
これはいいことでないと思っているうちに姉さ
まだ呼んだけ、姉起きて来てからその姉のお膳置いたら
姉食べたら大変だと思って、窓開けて外に投げたけ
カラスが飛んで来て、その投げたもの拾って
カラス食べたと思ったけ、すぐそこにカラス
ばたばたして、そこで倒れたの見てからもう
親がろくでもないことしたっていうことわかって
こんど学校へ行く、おにぎり[46]作ってもらって
学校へ行ったんだけども、昼の時間なったから
姉のおにぎり取って窓から投げたけ
やっぱりカラス来て食ったけ、すぐ
そのカラスもそこでバタバタして死んだの見た。
こんど自分の弁当分けて二人で食べたんだけども足りない。
ご飯足りないもんだから外へ出て二人で泣いていたけ
そこさ先生出て来て「なして泣いてる？」って言うから

---

[44] ここからしばらくは妹の一人称叙述の形式をとる。叙述者の切り替わりを宣言するのは、アイヌ語テキストも同様である。
[45] ここでは「自分さ」という語句を二度続けていたが強調の意味ではないと判断して一つ省いた。
[46] 上田氏は、アイヌ語テキストでは「おにぎり」を BENTOU 「弁当」と表現している。

こうこうゆうわけで「弁当に姉の弁当に毒入れて
親がくれたの見たんで、それカラスに投げたけ
カラス食って死んでるの見たから
自分の弁当二人で分けて食べたんだけども
お腹空いて泣いてるんだ」ったけ「それだら
ご飯持って来てやるから」ちって、学校の先生に
弁当貰って食べてから、うちさ帰ったけ
自分の親、変な顔して、「今朝も食べらしてもなんともなかった。
昼にも食べるように毒入れてやったもの
どうしてその、生きて帰って来てるべ」と思って
その継（まま）おっかさんは変に思っていたけどもそれから
なんのなんも、いじわるしたようなふうもわからないでいたもの
まだなんか変だから…、こそこそ気をつけていたけ
その稼ぎ人アシンカㇻ（足軽）だかっていう稼ぎ人の
シャモ（和人）らに、その「姉殺してくれー。
そうすれば金欲しかったら、なんぼでも金やるから」って
いうこと言ったけ、そのアシンカㇻ　ウタㇻあと（足軽の人たち）
「嫌だ」って言っても聞かないで怒るもんだから
返事したのわかったから、こんどこりゃあ、また
姉殺されたら大変だと思って、こんどその晩に
もう寝る時間になってから姉は布団さ寝たの見てから
自分こっそり裏口から出て町さ行って、人形さん
大きな人形さん、姉みたいな人形さん買って背負って来て
こそこそ裏口からまた入って姉の部屋さ
そのまくって姉を眠ってるのを押入れさ入れて
姉隠して、その人形さん、姉のようにして布団の中さ
入れて寝かしておいて自分も押入れさ入って隠れて見てたけ
夜中の時間になったけ、その稼ぎ人のアシンカㇻ（足軽）ら来て
姉の首切って床起こして、そこさ姉入れたの見てから
もうたまげてたまげて、明日の朝になってから
そのおっかさん、自分さ「起きて来い」って言って自分さ
姉さ呼ばないで自分さだけ呼んでから、自分起きて来て
自分の姉は夕べ殺されたもんだと思うもんだと
思うもんだから、姉のお膳なく、自分のお膳だけあったから
「自分食わない」ったけ、「なして食わない」って言うから
「姉も食わないもの、自分食わない。姉さ呼んでくれ」ってたけ
その姉さ呼んだけ、姉下りて来たんで、もう、びっくりして

「夕べ、殺したと思ったもの、どっから出て来たべ」と
思って、もうもう、おっかさんはびっくりしながら
姉のお膳も作ってくれて、姉と二人で食べて
そのおっかさんにすれば「毒入れてもこの…、もう死なない。
夕べ首とったと思ったもの。それも生きてるとは
どういうことだべ」と思ってもう一人、気持ちの中で悩んでいたの
その妹の方はわかっていたんだけどもなんも言わないで
それから…、しばらくになってなったけ
ふうがおかしいと思っていたけ、その町さ行って
「死人の棺箱(かんばこ)買って来い」ってそして「そこさ、その姉娘が入れて
今度は生きたままでそこさ入れて持ってって埋めてくれ。
そうすれば、こんどだけでも殺しにいいべから」からって言って[47]
その稼ぎ人のアシンカㇻ (足軽) だかあとに言ったら
「嫌だ」って言ったって聞かないで、怒りつけて
とうとう行って、その棺箱買って来るようだから
棺箱作るとこさ、その妹はまた行って棺箱作る人に頼んで
「スマッコ (隅) の方に大きな穴開けておいてくれ」って
言って頼んでそれから、その妹は花の種あっちこっち
捜して歩いていっぱい花の種買って来て袋さ入れて姉に
「その棺箱さ入れられるようだから、入れて、棺箱さ入っても
この花の種と行く、いっぱい散らかしながら行け
そうすれば遅いか早いかに、絶対助けに行くから」って
言って姉さやったけ、姉もその花の種、泣きながら取って
棺箱さ入れられて担がれて行ったの、後(あと)さ見て、
自分もワンワン泣いていたけども、こんど泣くの止めて
おっかさんに「東京さ遊びに行きたいから、
ごっつぉ (ご馳走) 作ってくれー」って
「ごっつぉ、二人分のごっつぉ作ってくれ、くれ」って
「だら、東京さ背負って行って東京のおばさんと食べるから」って
言って言ったけ、その姉いないで妹だけ「遊びに行く」って
言うもんだから、おっかさんは喜んでいっぱい
ごっつぉ作っているうちに、姉の着物、いい着物、もう選んで
自分の着物も選んで二人分の着替えするもの背負って
そのごっちょ背負って外さ出てから、もう、ずっと
その花の種散らかして行った跡伝わって行って行って

---

[47] この後は「その、かし…、アㇱ、稼ぎ人の、アシンカㇻ」と言っているが、その言いよどみを省いた。

山さ行って穴掘ったあとあるのに、その上に大きな石のっけてあるんで
その石動かすこともできなくて、そこで泣いていたけ
ぽっと立派な神さんというのか、お姫さんが現われわれて
そのお姫さんが言うのには「なして泣いてる？」って訊いたけ
訊いたから、こういうわけで「姉と二人で暮らし
姉と二人兄弟でいたのに親が神さ、神参りに行くからって言って
母親にお願いして出て行った後に母親がいじわるして
もう、姉さ苛めて苛めて殺す気になっていろんなことして
毒、ご飯に入れたりしても、その毒も食わせないように
自分、カラスさ投げてやったり、人形買って来て
首とって床下さ入れるって言ったときも
姉の代わりに人形持って来て置いて、首とって
床下さ入れたりしたけど　姉は自分隠して
押入れの中さ隠しておいて生かしたのにまた
棺箱さ入れるったの、あれしたからもう
自分は姉死んだら自分も死んでもいいと思って
花の種持たしたの、その花の種の跡伝わって自分来たけ
こうやって石のっけてあって自分、起こすこともできなくて
もう、ここで姉と死ぬと思って泣いてるんだ」って言ったけ
その立派なお姫さん「ああ、いい。したら自分助けてやるから」ちって
その石寄せて、そしてその砂も投げて投げて箱の蓋取ってみたけ
姉は死んでいて、もう、姉死んでると思って自分は泣いて
あれしたけ、そのお姫さんがきれいな水色と血色（ちいろ）とした
ピン（ビン）二品出して、それを姉さ付けて付けて、付けているうちに[48]
段々、姉が生きた人間のその血色になって、なってなって
姉がその薬がなくなったあと、一緒に姉助かって起きたんでも
本当に喜んで喜んで、したけ、そのお姫さまが言うのには
「自分はこの姉の母親だ」って、「母親なんだけども自分は
このお日さんの神さんが自分さ好きで好きで自分さ殺して死んで
神さんになって自分はいるから自分の娘おいて行ったのは
かわいそうで自分は見守っているうちに
その妹も本当に精神のいい娘で、二人とも見守っていていたから
それで、その毒も入ったご飯も投げてカラスさ食わせる
おにぎりも投げてカラスさ食わせる、人形も
自分のその妹にこうしてああしてちゅうこと考えらして

[48] アイヌ語テキストでは、この場面では薬を塗りながらフッサカㇻ hussakar「息吹をかける」という医療行為を行っている。

人形に買って来て殺して床さ下さ入れた思った。
そのまんま、おっかさんは思っていてもそれが意地悪だから
それも出来ないでいるうちに、またこうやって持って来て
埋けたら今度は生きて帰んないと思って喜んでいるだけど
自分はちゃんと神さんだから見ていてこうやって助けたんだから
これからはなんも恐ろしいこともないから」って言って
そこで立派な姉の箱の中に着っていた着物ももう脱いで
みんなそこで投げてから、自分背負って行った着物も
姉さ着して、自分も着て行った着物、そこで投げて
自分もちゃんと着替えしたけ、そのお姫様が
「ここでお前と二人とも嫁に行くとき着るものなんでも揃えて
自分持って来てるから、これ銘々に背負って
これから行ったらまた途中で殺すか生かすかでいうとこさ
届くから、そこで行っても自分見守ってやってそっから
生き抜いて行ったら、そのうち父親見っけるから」って言って
そのお姫さんはそこで言いながら泣きながら言って
そのごっつお（ご馳走）も三人してそこで食べて
自分らも泣く、そのお姫さんも泣いてそこで
「もう二度と自分の姿はお前ら見ることできないから
仲良く暮らして、ば、いい」って言って
そこでそのお姫様が姿見えなくなってから喜んで
姉と二人でもう、お互いにもう助かることわかってから
二人でもう喜んでその荷物背負って
下が…、どこさか行ったけ、背負って
大きな鎌振り回しながらいる人が何人もそこにいて
「自分らさ殺す」って言って鎌振り回したけど
こういうこういうわけで「自分らは苦労して苦労して
どうにか、生きてきたんだから、ここ渡してください」って
自分ら言ったけ「それだら可愛そうだから」って渡してもらって
行って行って、どっかさ行ったけ大きな町あって
その町さ行って、したら町の真ん中に一番大きな宿屋あってから
そこへ行って、そっから稼ぎ人の人ら来て
「こんな、それこそ立派な良い娘ら、今まで見たことない娘ら
どっからか二人歩いて来てる」っていうので
もう、迎えしてもらって、自分の荷物とってもらって
手ひかえてもらって入れてもらって
「まあ、こんな、それこそ見たことない器量のいい娘らばり

たまげた」って言われるながら、そこへ入っていたけ
そこの宿屋の旦那ももう、たまげてたまげて
自分らさ、器量いいこと、可愛がってもらって
そこにいるうちにもう仕事教えてもらって
なにかにと拭き掃除でも煮焚きでもなんでも仕事しているから
そこの旦那さんも喜んで喜んで自分らさ可愛がってくれて
なんも苦労しないでそこにもう何ヶ月もいても外へも出たことないから
ある日に「あんまり外へも出たこともないで家の中にばっかりいて
寂しいから、一回、町通して町見してくれ」って頼んだけ
「それも本当だ、本当だ。今まできても外へも出さないで
家の中にばっかりいるから、ゆっくり遊んでこい。
遊んでこい」って言って、もう、たいしたいいもの着せてもらって
履かしてもらって、二人でまた出て、笑いながら
あっち寄り、こっち寄りして笑いながら歩いてたけど
歩いていたけど、どこだか歩いていたけ
大きな荷物背負った人、向こうから来ていたの見えてから
「おっかないな」と思いながら行ったけ、したけ、
なんか近間さ来たけ、なんか親でないべかって
いうような感じして行って、行き会って、お互いに傍さ行ったけ
自分の父親で「自分の親でないか」ったけ、「そうだ」って言う。
「自分の娘でないか」ってお互いに名前言って「そうだ」っていうことで
どういうわけで、喜んで、そこで、抱きやっこ（抱き合い）して
「どういうわけでお前とこんなとこにいる」っていうこって
こういうこういうわけで「親が意地悪して、毒弁当持たされて
それも投げる。毒飯（どくめし）お膳まま投げたり、そして人形置いて
その人形も、親がそういうふうに稼ぎ人の人らに
しつけていたから床下さ姉だと思って入れたのも
そこにも助けて、また来て埋けられたとこにお姫様が来て
助けてもらって来てここにいるんだ」っていうこと言ったけ
もう自分の父親もたまげてたまげて戻って来て
その自分らお世話になって宿屋さ来てこういうこういうわけで
「自分の娘ら苦労して来たの助けてもらってのありがたい」って
そこに何日も泊まってお礼しながら遊んでいていてそれから
もう帰るっちゅうことなって、もう三人して戻って来て来て
自分の家さ来たんだけど、いきなり「お前と顔立たないでいれ」って
こういうふうにあの隠して「タンスの中さ入れて隠しておくから

隠れていれ」っていうことでその自分の父親一人で入って行ったけ
まるっきり自分のその旦那言うのに喜んで自分[49]入ってきたけ
喜んで戸開けてくれて自分入ったけ
「もう無事に自分、神さん参りして帰ってきたの。
良かった」ちゅって喜んでくれたけどもその自分の父親言うのに
「どういうわけで、お前だけ見えて…、娘ら見えない」ったけ
「娘ら東京さ遊びに行きたいって言ったから二人で
遊びに東京さ行かしてしまっていないんだって言った」けど
自分言いながらいたけども、その父親はもうわかってるから
なんもそこで言わないで「お前のお土産いっぱい持って来て
タンスさ入れてあるから行って、取って来い」ったけ
そのおっかさん喜んで来て、タンス開けて見たけ
自分ら中にいたの見たけ、もうびっくりしてもうもう
そこで倒れるような格好してしたけども…、家行ってから
「どういうわけで、そやっていろいろ毒食わしたり殺す気になったり
埋けたりした」って、その父親怒って怒ってあれしたけ
「あんまりその先にいた娘が頭いい。自分の産んだ娘は
頭悪いのに先にいる姉が生かしておいたら自分の娘が
その財産にもう、貰わなかったりしたらかわいそうだと
思って、それで姉を殺す気になっても殺されなかったけ。
もう自分はとうとう罰当てられた」って言ったとたんに
もう自分の親怒って、その親[50]さ叩くやら蹴るやらなにやらって
そこに親殺してしまってるの見て初めてお互いに安心してから
片付けたりいろんなことしたんだべさね。えっへへへへ[51]。
してから、親と一緒に生活して、もう本当に仲良く暮らしてるうちに
親父言うのには「あの別に妹の家、すぐそばに家建てて同じく
同じ家、同じ財産、同じく分けて仲良く暮らし」ちゅうことで
そういうふうにしてから姉にも婿貰いして、もう
自分の家も建てて婿貰いして、もう立派な生活して暮らしたの
父親も自分らの生活も見たり、子供出来たら見たりしてから
親死んで安心したもんだから言うって、シネ（一つ)…、
一人のシャモ（和人）の物語です。

---

49 ここの「自分」とは、妹の一人称叙から父親の一人称の叙述に切り替わっている。
50 後妻のこと。
51 上田氏はここで笑った後で妹の一人称叙述に切り替えた。

４．アイヌ語テキスト

シサㇺ　カムイ　トノ　オルㇱペ　ネ
sisam kamuy tono oruspe[52] ne　　和人の立派な旦那さんの話です。
シサㇺ　カムイ　トノ　アン　ヒケ　オラ
sisam kamuy tono an hike ora　　和人の立派な旦那さんがいて
シサㇺ　ネ　クス　ネㇷ゚　ネ　ヤッカ
sisam ne kusu nep ne yakka　　和人なので、なんでも
イチェン　ネ　ヤッカ　アエㇷ゚　ネ　ヤッカ
icen ne yakka aep ne yakka　　お金でも食べ物でも
ネㇷ゚　ネ　ヤッカ、　ポロンノ
nep ne yakka (a) poronno　　なんでもたくさん
コㇿ　ペ　ネ　クス　ネㇷ゚　カ
kor pe ne kusu nep ka　　持っていたので何も
エシㇼキラㇷ゚　カ　コンルスイ　カ
esirkirap ka kor rusuy ka　　心配も欲しいものも
ソモ　キ　ノ…、オカ　アン　ペ　ネ
somo ki no (okay pa,,,) oka=an[53] pe ne　　なく暮らしていました。
オラ　オラノ　ネㇷ゚　カ　ソユン、
ora orano nep ka soyun,　　そして、なにか外の
ネㇷ゚キ　アナㇰネ　ポロンノ、シサㇺ
nepki anakne poronno (si) sisam　　仕事というのは大勢の和人たちを
ネㇷ゚キ　シサㇺ　ウタㇻ
nepki sisam utar (a)　　働く和人たちを
アウテㇰ　シサㇺ　ウタㇻ
a=utek[54] sisam utar　　稼ぎ人たちを
ポロンノ　アウウェカリ　ワ、
poronno a=uekari wa (an,,,)　　たくさん集めて
アン　ペ　ネ　クス　ネㇷ゚　カ
an pe ne kusu nep ka　　いたものなので、なにも
アカㇻ　カ　ソモ　キ　ノ
a=kar ka somo ki no　　私がすることもなく
アナン　ペ　ネ　コㇿカ
an=an pe ne korka　　暮らしていましたが

[52] モニターから「oruspe→orospe の可能性」と指摘された。聞き直してみると確かにオロㇱペ orospe のように聞こえるが、上田氏の通常の語りではオルㇱペ oruspe と発音されることが多いのでその音の形で記した。
[53] ここまでは第三人称の語りであったが、ここころ和人の旦那さんの一人称叙述の形式になる。これ以降も第三人称、和人の旦那さんの第一人称、妹の第一人称による叙述に変換する箇所がある。
[54] アウテㇰ a=utek は、ジョン・バチラー『アイヌ・英・和辞典　第四版』に「Autek、アウテㇰ、使ワレタ.」と記載あり。上田氏のアウテㇰ　シサㇺ a=utek sisam の日本語訳は「稼ぎ人」なので、それを日本語訳に記した。

パテㇰ　アエイコイトゥパ　ㇷ゚
patek a=eykoytupa p　　ただ一つの望みは
ポサカン　ワ　オラノ
posak=an wa orano　　私は子供がいないので
ポエイコイトゥパアン　ワ　オラノ
poeykoytupa=an wa orano　　子供が欲しくて
アマチヒ　アナㇰネ　ケㇱト　アン　コㇿ
a=macihi anakne (e,) kesto an kor　　私の妻は毎日
クネイワ　ホプニ　コㇿ　ナニ
kuneywa hopuni kor nani　　朝起きるとすぐに
チュㇷ゚　カムイ　オルン　イノンノイタㇰ
cup kamuy[55] or un inonnoytak[56] (ii,)　　太陽の神様に祈りました。
ヤイカタ　カ　ネ　シサㇺ　カムイ　トノ　カ
yaykata ka ne sisam kamuy tono ka　　自分も、和人の旦那さんも
イノンノイタㇰ　コㇿ　オカ　ロㇰ、クス
inonnoytak kor oka rok (ay,)[57] kusu　　祈りごとをしていると
ネ　カムイ　トノ　マチヒ　ホンコㇿ　ワ
ne kamuy tono macihi honkor wa　　その旦那さんの奥さんが妊娠して
オラノ　エヤイコプンテㇰパ　コㇿ
orano eyaykopuntekpa kor　　それから一緒に喜んで
オカ　ラポッケ　ヌワㇷ゚　アクス
oka rapokke nuwap akusu　　暮らして、出産すると
ピㇼカ　ワ　オケレ　ポン　マッカチ　コㇿ　ワ
pirka wa okere pon matkaci kor wa　　かわいい女の赤ちゃんを授かって
オラノ、エウコヤイコプンテㇰパ　コㇿ
orano eukoyaykopuntekpa kor　　喜び合いながら
ネ　ポン　マッカチ、エチョㇰヌレ　コㇿ
ne pon matkaci (e) ecoknure kor　　その赤ちゃんに接吻しながら

---

[55] 子供を授かるためにチュㇷ゚　カムイ cup kamuy（太陽の神）へ祈るのは原典と同様であるが、原典では子供を産んだ後に死んだ母親はチャ　カムイ CA kamuy（蛇の神）の妻になっていたことが姉娘を土中から救い出した場面で語られている。この神について木村キミ氏から「蛇のカムイ」という説明を受けたと中川から教示を受けた。なお、チュㇷ゚ cup（太陽）の実際の発音は一貫して「ツㇷ゚」であるが凡例に基づいてカナ表記した。
[56] 原典では、「朝に祈る」ということは語られていない。上田氏が付加した箇所である。また、原典では旦那さんが祈っており、妻が祈るという表現はない。アイヌの習俗で子供を授かるためのまじないはいろいろあるが、沙流川流域のアイヌの一般的習慣として、男が妻の枕の中に太刀、矢筒、丸木舟などの小さな模型を隠し入れておく行為が知られている。
[57] アイネ ayne の言いよどみの可能性がある。

オカ　ラポッケ　タネ、ポロ　ワ…、	
oka rapokke tane (e) poro wa (a, wa)	暮らしていたところ今や成長して
ポ　ヘネ　アエヤイコプンテㇰ　コㇿ	
po hene a=eyaykopuntek kor	なおいっそう喜んで
アオマㇷ゚　コㇿ　オカアン　ラポッケ	
a=omap kor oka=an rapokke[58]	可愛がって暮らしていたところ
ネ　カムイ　トノ　マチヒ	
ne kamuy tono macihi	その旦那さんの奥さんが
ポン　シイェイェ　イネ　イサㇺ　ルウェ　ネ	
pon siyeye hine isam ruwe ne	ちょっとした病気で死んでしまいました。
ヒネ　オラノ　ネ　カムイ　トノ	
hine orano ne kamuy tono	それからその立派な旦那さんの
マチヒ　カ　イサㇺ　ヒケ　カネ　コㇿ	
macihi ka isam hike kane kor,	奥さんが亡くなったままに
シネ　マッカチ　オマㇷ゚　コㇿ	
sine matkaci omap kor	一人娘を可愛がって
アン　ルウェ　ネ　アクス…、	
an ruwe ne akusu (o,,,)	暮らしていると
オヤ　シサㇺ　ウタㇻ　エネ　ハウェ　オカ　ヒ	
oya sisam utar ene haweoka hi	他の和人たちがこのように言いました。
エネ　アン　トノ　ピㇼカ　トノ	
〝ene an tono pirka tono	「あの立派な旦那さんが
オラ　ヤイコアン　プイネ　アン　ワ	
ora yaykoan puyne an wa	あれから独り身で、
ヤイコアン　ワ　ネ　シネ　マッカチ	
yaykoan wa ne sine matkaci	やもめ暮らしになって一人娘を
レス　コㇿ　アン　シリ　カ…、	
resu kor an siri ka,,,	育てている様子には、
アエオリパㇰ　セコㇿ、	
(a, a, ne) a=eoripak〟 sekor(o)[59]	私たちは尊敬する」と
ハウェオカパ　コㇿ　オラ	
haweokapa kor ora	言っていると

58 ラポッキ rapokki にも聞こえる。
59 ここでは旦那さんが他人から誉められているが、原典では他人のことばは語られていない。旦那さん自らが「このように偉い立派な殿が自分でこのようにしていても駄目だ」と言って、美しい女と再婚している。

ピッカ　ワ　オケレ…、
pirka wa okere, (e, men, sis,)　　とても美しい…、
シサムって、ピッカ　ワ　オケレ　メノコ、
sisam TTE, pirka wa okere menoko (o)　　和人のとても美しい女が
エㇰ　ヒネ　トゥラノ　アナン　ワ　オラノ
ek hine turano an=an wa orano　　来て、一緒に暮らして
ネ　アコㇿ　マッカチ…、
ne a=kor matkaci (u,,,)　　その私の娘を
アウコオマㇷ゚　コㇿ　アナン　ラポッケ
a=ukoomap kor an=an rapokke　　一緒に可愛がりながら暮らしていたところ
スイ　イヨㇱ　エㇰ　メノコ
suy iyos ek menoko　　再び、後から来た女が
ホンコㇿ　ヒネ　ヌワㇷ゚　アクス
honkor hine nuwap akusu　　妊娠して出産すると
スイ　マッカチ　コㇿ　ヒネ
suy matkaci kor hine　　また女の子を授かって
オロワノ　ポ　ヘネ　ネ　カムイ　トノ
orowano po hene ne kamuy tono　　それからなおいっそう旦那さんが
エヤイコプンテㇰ　ワ、　ホㇱキ　アン
eyaykopuntek wa (a) hoski an　　喜んで最初にいた
マッネポホ　カ　イヨㇱ　エㇰ　メノコ、
matnepoho ka iyos ek menoko (eun)　　女の子も、後から来た女が
コㇿ、　マッカチ　ネ　ヤッカ…、
kor (me) matkaci ne yakka (ukoomap)　　産んだ女の子であっても
アウコオマㇷ゚、アエヤイコプンテㇰ　コㇿ
a=ukoomap, a=eyaykopuntek kor　　可愛がって喜んで
オカアン　ラポッケ　タネ　ポロ　パ　ワ
oka=an rapokke tane poro pa wa　　暮らしていたところ、今では大きくなって
がっこう　オルン　カ　パイェパ　エアㇱカイ
GAKKOU or un ka payepa easkay　　学校にも行くことができる
パㇰノ　ポロ　パ　ルウェ　ネ　アクス
pakno poro pa ruwe ne akusu　　ほどに成長すると
ネ　カムイ　トノ　エネ　ハウェアニ
ne kamuy tono ene hawean hi　　その旦那さんがこう言いました。
アコㇿ、　マッカチ　ウタㇻ　エネ、
〝a=kor (o) matkaci utar ene (e)　　「娘たちがこうして

ポロ　パㇰノ　カムイ、まいり

poro pakno kamuy（MAI, kamu,）MAIRI　　育つまで神様参り

セコㇿ　アン　ペ　アン　ヒケ　カ

sekor an pe an hike ka　　というものがあっても

アㇻパアン　カ　ソモ　キ　ノ

arpa=an ka somo ki no　　私は行かないで

アナン　ルウェ　ネ　クス

an=an ruwe ne kusu　　いたので

タネ　パㇰノ　アコㇿ　ソン　ウタㇻ

tane pakno a=kor son utar　　もう今ぐらいに子供たちが

ポロ　ワ　ネ　ヤクン　カムイまいりに

poro wa ne yakun kamuy MAIRI NI　　成長したのだから神様参りに

アㇻパアン　ルスイ　ルウェ　ネ

arpa=an rusuy ruwe ne〞　　行きたいものだ」

セコㇿ　ネ　カムイ　トノ

sekor ne kamuy tono　　とその旦那さんが

ハウェアン　ルウェ　ネ　アクス

hawean ruwe ne akusu　　言うと

ネ　イマチヒ　ネ　メノコ、

ne imacihi ne menoko（o）[60]　　その妻である女が

カムイまいり　に　アコㇿ　ニㇱパ

〝kamuy MAIRI NI a=kor nispa　　「神様参りに旦那さんが

アㇻパ　ワ　イサㇺ　ヤッカ

arpa wa isam yakka　　行ってしまっても

アコㇿ　オペㇾ　ウタㇻ　ピㇼカノ

a=kor oper utar pirkano　　娘たちをきちんと

アエヤㇺ　ワ　アナン　クス　ネ　ナ

a=eyam wa an=an kusu ne na〞　　私が大事にしていますよ」

セコㇿ　ハウェアン　ヒ　オラ

sekor hawean hi ora　　と言うとそれから

ネ　カムイ　トノ　カムイ、アㇻパ　クニ

ne kamuy tono kamuy[61], arpa kuni　　その旦那さんが神参り（？）に行くように

---

[60] 原典では、夫の頼みに後妻は答えていない。「先妻の娘は頭がよくて生きていたら、私の娘が財産を与えられないで困るから、夫が不在なうちに毒で殺してしまおう」という後妻の悪巧みが語られている。

[61] ここまでの文脈からみて、「カムイまいりに kamuy MAIRI NI 」と言おうとしたが「まいりに」を言い損なったと思われる。

エヤイェトコイキ[62]　ヒネ　アㇻパ　ワ、イサㇺ	
eyayetokoyki hine arpa wa (wa) isam	身支度をして行ってしまいました。
アコㇿ　マッカチ　ウタㇻ　ピㇼカノ	
“a=kor matkaci utar pirkano	「娘たちをちゃんと
エヤㇺ　ワ　がっこう　オルン、	
eyam wa GAKKOU or un	大切にして学校へ
パイェパ　クニネ　セコㇿ、	
(pa) payepa kunine” sekor (o)	行くように」と
ハウェアナ、ハウェアナ　ハウェアナ　コㇿ	
hawean a,,, hawean a hawean a kor	何度も言うと
オラ　ネ　ウテㇰ　シサㇺ　ウタㇻ　エウン　カ	
ora ne utek sisam utar eun ka	それから稼ぎ人たちにも
オハシㇼ　ピㇼカノ　エプンキネ　クニ　カ	
ohasir pirkano epunkine kuni ka	きちんと留守番するように
イェ　ア　イェ　ア　コㇿ	
ye a ye a kor	重ねて言いながら
ネ　カムイ　トノ　アㇻパ　ワ	
ne kamuy tono arpa wa	その旦那さんが行って
イサㇺ　ルウェ　ネ　アクス	
isam ruwe ne akusu	しまうと
オラノ、　ネ、　イマタㇰネ、	
orano (o) ne (i) imatakne (e)	それからその妹の方の
マッカチ　オラノ　イソイタㇰ	
matkaci orano isoytak[63]	娘がしゃべります。
アオナハ、　アニ　タ　アナㇰネ、	
a=onaha, an hi ta anakne	私の父さんがいたときには
アサハ　カ　エアㇻキンネ	
(aas,) a=saha ka earkinne	姉さんのことも本当に
アウヌフ　オマㇷ゚　ワ　アン	
a=unuhu omap wa an	母さんは可愛がっていた
オカアン　ペ　ネ　ア　ㇷ゚	
oka=an pe a p	ものであったのですが、
アオナハ　イサㇺ　アクス　オラノ、	
a=onaha isam akusu orano (a)	父さんが行ってしまってからは

[62] 音声はエヤイェ、エトコイキ eyaye, etokoyki と聞こえるが、筆者の判断で修正した。
[63] ここから妹の一人称叙述に切り替わるという文句を入れているが、原典では叙述者の人称が変化する際にこのようなことばをまったく入れていない。

アサハ　さ　コイタㇰエアㇻカ
a=saha SA koytakearka　姉さんにひどいことを言いいました。
アウヌフ、コイタㇰエアㇻカ　コㇿ
a=unuhu, koytakearka kor　母さんが彼女をいじめて
アン　シリ　アコヌコㇱネ　コㇿ
an siri a=konukosne kor　いる様子を私は面白くなく
アナン　ペ　ネ　ア　ㇷ゚
an=an pe ne a p　思っていましたが
スイ…、　がっこう　オルン
suy（hi, GA,）GAKKOU or un　また、学校へ
アㇻパアン…、　クネイワネ　ネ
arpa=an（pa, uu,,,）kuneywane ne　行く朝になって
ホッケアン　ワ　オカアン　コㇿ
hotke=an wa oka=an kor　私が横になっていると
ホㇱキ　ノ　イモソソ　オラ　イヨㇱ
hoski no i=mososo ora i=os　先に私が揺り起こされてから後に
アサハ　モソソ　ランケ　コㇿ
（a）a=saha mososo ranke kor　姉さんを起こして
オカアン　ペ　ネ　ア　ㇷ゚
oka=an pe ne a p　いたのでしたが
ホㇱキノ　スイ　イモソソ　ヒ　クス
hoski no（u）suy i=mososo hi kusu　先にまた私を揺り起こしたので
ホプニアン　アクス…、
hopuni=an akusu[64]（u,,,）　私が起床すると
オッチケ　オッタ　アサ、エピヒ
otcike or ta a=sa（ep,）epihi　お膳に姉さんの食べ物と
ヤイカタ　アエㇷ゚　トゥ　オッチケ
yaykata aep（e）tu otcike　自分の食事を、二つのお膳に
カㇻ　ヒネ　アヌ　ヒネ
kar hine anu hine　こしらえて置いて
アコㇿ　オッチケ…、アナㇰネ
a=kor otcike（una,）[65] anakne　私のお膳には
ネㇷ゚　カ…、　オマレ　シリ　カ
nep ka（aaa,,,）omare siri ka　なにも入れる様子を

---

64 アクス akusu と記したが「ナクス」とも聞こえる。
65 ウンun と言いかけたが、すぐにアナㇰネ anakne「～は」に言い換えたと思われる。

アヌカㇻ　カ　ソモ　キ　ㇷ゚	
a=nukar ka somo ki p	見なかったのですが
アサハ　コㇿ　オッチケ　エウン	
a=saha kor otcike eun	姉さんのお膳へ
ネㇷ゚　カ　オマレ　ノイネ　イキ　シリ	
nep ka omare noyne iki siri	なにか入れたような様子を
アヌカㇻ　ヒ　クス　オラ	
a=nukar hi kusu ora	私が見たので
ナニ　ネア、アサハ　コㇿ　オッチケ、	
nani nea (a) a=saha kor otcike (e)	すぐに姉さんのお膳
オッタ　オカ　アエㇷ゚　プヤㇻ　カリ	
or ta oka aep puyar kari	にあった食べ物を窓から
オピッタ　アチャリ　ルウェ　ネ　アクス	
opitta a=cari ruwe ne akusu	全部ばら撒くと
オロ　タ　パㇱクㇽ　エㇰ　ヒネ	
oro ta paskur ek hine	そこにカラスがやって来て
ネ　アチャリ　ア　アエㇷ゚　パㇱクㇽ	
ne a=cari a aep paskur	私が撒いた食べ物をカラスが
エ　アクス　ナニ　オロ　タ　パㇱクㇽ	
e akusu nani oro ta paskur	食べるとすぐにそこでカラスが
ホチカチカ　ヒネ　ライ　シリ　イキ　ヒネ、	
hocikacika hine ray sir iki hine[66]	もがいて死んだ様子に
イヨクンヌレアン　ソンノ	
(a) iyokunnure=an sonno	私は驚いた。本当に
アウヌ　ウェンサンペ　コㇿ　シリ、	
a=unu wensanpe kor siri	私の母さんの根性の悪いことを
アコヌコㇱネ　コㇿ　オラ、	
(e) a=konukosne kor ora	憎らしく思いながら
アサ　トゥラノ　がっこう　オッタ	
a=sa turano GAKKOU or ta	姉さんと一緒に学校に
パイェアン　ヒネ　オラ	
paye=an hine ora,	行ってから

66 本テキストでは、毒を食べたカラスは死んでいるところまで語っているが、原典では死の表現はなく、「バタバタする」「皆が転がる」と語っている。

チュワン	
（a, a, a, ne,,, cu,）cuwan[67]	昼飯
ネ　ヒ　タ　オラ　アサ…、コㇿ	
ne hi ta ora a=sa,（a, kor, o, a）kor	のときに姉さんの
べんとう、アウㇰ　ヒネ、スイ	
（BE,）BENTOU（o）a=uk hine（i）suy	おにぎり[68]を私が取って、再び
がっこう　オㇿ　タ　アン　プヤㇻ　カリ	
GAKKOU or ta an puyar kari	学校にある窓を通して
ネ　アサ　コㇿ　べんとう	
ne a=sa kor BENTOU	姉さんのおにぎりを
アチャリ　ルウェ　ネ　アクス	
a=cari ruwe ne akusu	ばら撒くと
オロ　タ　スイ　パㇱクㇽ　エㇰ　ヒネ	
oro ta suy paskur ek hine	そこにまたカラスが来て
ネ　アエㇷ゚　エ　アクス	
ne aep e akusu	その食べ物を食べると
ナニ　スイ　オロ　タ　パㇱクㇽ	
nani suy oro ta paskur	すぐにまたそこでカラスが
ライ　シリ　イキ　ヒネ　オラ	
ray siri iki hine[69] ora	死んでしまったから
イヨクンヌレアン　コㇿ　オラ、	
iyokunnure=an kor ora（a）	私は驚きながら
ヤイカタ　アエ　べんとう　アサンケ　ヒネ	
yaykata a=e BENTOU a=sanke hine	自分のおにぎりを出して
アサ　トゥラノ　アウコウサライェ　ヒネ	
a=sa turano a=ukousaraye hine	姉さんと一緒に分け合って
アエ　カ　キ、ア　コㇿカ　オラ、	
a=e ka ki, a korka ora（a）	食べたけれども、それから
ソイ　タ　アサ　トゥラノ	
soy ta a=sa turano	外で姉さんと一緒に
ソイェンパアン　ヒネ　トゥン　アネ　ヒネ	
soyenpa=an hine　tun a=ne hine	外に出て二人で

[67] 原典では ciwan と記されており、saha ciwani「姉の弁当」という所属形も現れる。
[68] 上田氏は べんとう BENTOU（弁当）を「おにぎり」と訳しているのでそれに従った。
[69] ヒネ hine のヒ hi が聞きとりにくい。

チサン　コㇿ、アナン　ルウェ　ネ　アクス	
cis=an kor (o) an=an ruwe ne akusu[70]	泣いていると
オロ　タ　がっこう　オルン　せんせい	
oro ta GAKKOU or un SENSEI	そこに学校の先生が
ソイェネ　ヒネ　イヌカㇻ　ヒネ	
soyene hine i=nukar hine	出て来て、私たちを見て
マㇰ　ネ　ヒネ　エチチㇱ　コㇿ　オカ	
〝mak ne hine eci=cis kor oka〟	「どうして泣いているのだい？」
セコㇿ　イコウウェペケンヌ　ヒ　クス	
sekor i=kouwepekennu hi kusu	と訊ねられたので
あの　タㇷ゚ネ　カネ　アコㇿ…、アウヌフ、	
ANO tapne kane 〝a=kor (a=sa) a=unuhu,	かくかくしかじかと「私の母さんが
ウェイサンペコㇿ　ワ　アサハ　コㇿ	
(u) weysanpekor wa a=saha kor	悪い根性を持って姉さんの
べんとう　オルン、スㇽク　オマレ　ワ	
BENTOU or un (u) surku omare wa	おにぎりの中に毒を入れて
キ　アヌカリ　クス　プヤㇻ　カリ	
ki a=nukar hi kusu puyar kari	いたのを私が見たので窓から
アオスラ　アクス　パㇱクㇽ、エㇰ　ワ	
a=osura akusu paskur (e) ek wa	私が捨てるとカラスが来て
エ　アクス　ナニ　ネア　パㇱクㇽ　カ	
e akusu nani nea paskur ka	食べるとすぐにそのカラスも
ライ　シリ　アヌカㇻ　ワ　ヒ　オラ	
ray siri a=nukar wa hi ora	死んだのを見て
アコㇿ　べんとう　アサンケ　ヒネ	
a=kor BENTOU a=sanke hine	私のおにぎりを出して
トゥン　アネ　ヒネ　アエ　ア　コㇿカ、	
tun a=ne hine a=e a korka (a)	二人で食べていたけれども
イペルスイアン　ワ　チサン　コㇿ	
iperusuy=an wa cis=an kor	お腹が空いて泣きながら
オカアン　ルウェ　ネ　セコㇿ	
oka=an ruwe ne〟 sekor	いました」と
ネ　イマタㇰネ、ヒケ	
ne imatakne (e) hike	その妹の方が

[70] 原典では、この日は学校で床板の拭き掃除があったので一層空腹になったという事情が語られている。

ハウェアン　ルウェ　ネ　アクス、
hawean ruwe ne akusu　　言うと
ネ　せんせい　イヨクンヌレ　コㇿ
(SO) ne SENSEI iyokunnure kor　　その先生が驚いて
ヤクン、べんとう　も、アコㇿ　ワ
"yakun (u) BENTOU MO, a=kor wa　　「だったら、先生がおにぎりを持って
エカン　クスネ　セコㇿ　ネ　せんせい
ek=an kusune" sekor ne SENSEI　　来てやる」とその先生が
ハウェアン　コㇿ…、べんとう　アㇻパ
hawean kor BENTOU ARUpa[71]　　言うと、弁当があった
クス　べんとう　コㇿ　ワ　エㇰ　ワ
kusu BENTOU kor wa ek wa　　ので弁当を持って来て
オラ　アエ　ヒネ　オラ　オヌマン
ora a=e hine ora onuman　　それから私たちが食べて夕方に
トゥン　アネ　ヒネ　イワㇰアン
tun a=ne hine iwak=an　　二人して帰る
ルウェ　ネ　アクス　アウニ　タ
ruwe ne akusu a=uni ta　　と、自宅に
パイェアン　ルウェ　ネ　アクス
paye=an ruwe ne akusu　　行くと
アウヌフ　イポロウェン　ワ
a=unuhu iporowen wa　　私の母さんが顔色を変えて
オケレ　ヒ　アナㇰネ
okere hi anakne　　しまったということは
ネウン　カ　アカㇻ　ワ…、
neun ka a=kar wa (a, a=kor, a)　　なんとかして
アサハ　ライケ　クナㇰ　ラム　ワ
a=saha rayke kunak ramu wa　　私の姉さんを殺そうと思って
クネイワ　カ、スㇽク　オマレ　ワ
kuneywa ka (a) surku omare wa　　朝も毒を入れて
ヒ　アエラㇺアン　ワ　アオスラ　ワ
hi a=eraman wa a=osura wa　　そのことを私が知ってそれを捨てて

---

71 アㇻパ arpa「行く」の可能性も考えたが、過去に上田氏が日本語の動詞に複数形を表す接尾辞パ -pa を付けた表現を聞いたことがあったので、そのように解釈した。ここは「べんとう　オカ　クス BENTOU oka kusu」と言うべきところであろう。

パㇱクㇽ　エ　ワ　ライ　ア　ㇷ゚	
paskur e wa ray a p	カラスが食べて死んだのであったが
スイ　ネ　べんとう　オルン　カ	
suy ne BENTOU or un ka	また、そのおにぎりにも
スㇽク　オマレ　ヒケ　カ　アサ、	
surkuomare hike ka a=sa (a)	毒を入れたものを姉さんが
エ　カ　ソモ　キ　ノ、エ　ヤクン	
e ka somo ki no, e yakun	食べもせずに…、食べたなら
ライ、ワ　イワㇰ　イサㇺ　ナンコㇿ　ペ	
ray (nan,,) wa iwak isam nankor pe	死んで帰ってこないだろうものを
エ　カ　ソモ　キ　ワ　クス	
e ka somo ki wa kusu	食べなかったものだから
シㇰヌ　ワ　イワキ　ネ　ヒ	
siknu wa iwak hi ne hi	生きて帰って来たことを
アコㇿ　ウェイサンペコㇿ　アウヌフ	
a=kor weysanpekor a=unuhu	私の根性の悪い母さんが
ラム　ワ　イポロ　クㇲ、　ワ　オケレ	
ramu wa iporo kus??, wa okere	思って顔色を変えてしまった
コㇿカ　オラ、　ネウン カ	
korka ora (a) nuen ka	けれども、どうもこうも
ハウェアナン　カ　ソモ　キ　ノ	
hawean=an ka somo ki no	私は話もしないで
アサ　トゥラノ、シノタン　ネ　ヤ	
a=sa turano (o) sinot=an ne ya	姉さんと一緒に遊ぶとか
ネン　ネン　イキアン　コㇿ	
nen nen iki=an kor	いろいろとしながら
オカアン　ルウェ　ネ　ア　ㇷ゚	
oka=an ruwe ne a p	いたものでしたが、
スイ　シネアンタ、	
suy sineanta (a)	また、ある日
アウェンウヌフ　ネウン　カ　スイ	
a=wenunuhu neun ka suy	ひどい母さんがなんとか再び
アサ　カㇻ　クナㇰ　ラム　コㇿ　アン　ノイネ	
a=sa kar kunak ramu kor an noyne	姉さんにしようと思っているような

イキ　シリ　アオペンパㇰ　ヒ　クス、
iki siri a=openpak hi kusu (u)[72]　　様子にみえたので
ピㇼカノ　シルワンテアン　コㇿ
pirkano siruwante=an kor　　しっかり見張って
アナン　ルウェ　ネ　アクス
an=an ruwe ne akusu　　いると
ネ、ウテㇰ　シサㇺ　ウタㇻ　エウン、
ne (e) utek sisam utar eun (u)　　あの稼ぎ人たちへ
タヌクランネ　ネ…、
"tanukuranne ne (i, i, si, no)　　「今晩…、
アサハ　ホッケ　ワ　アン　ヤクン
a=saha[73] hotke wa an yakun　　姉の方が横になったなら
エウン　おまえ、アウテㇰ　シサㇺ　ウタㇻ
eun OMAE, a=utek sisam utar　　そこへお前たち、稼ぎ人たちが
パイェパ　ワ　レクチ　トゥイェ　ワ
payepa wa rekuci tuye wa　　行って喉をかき切って
ライケパ　ワ　イコレ　ワ　オラ
raykepa wa i=kore wa ora　　殺しておくれ。そして
ナニ　ライ　ヤクン　イタ　チョㇿポクン
nani ray yakun ita[74] corpok un　　すぐに死んだら床の下に
オマレパ　ワ　イコレ　ヤㇰ
omarepa wa i=kore yak　　皆で入れてくれれば
ピㇼカ　セコㇿ　アン　ペ　アウヌ、
parka" sekor an pe a=unu　　よい」ということを、母さんの
ハウェアン　ハウェ　アヌ　アクス
(ha) hawean hawe a=nu akusu　　話し声を私は聞いていると
ネ　アウテㇰ　シサㇺ　ウタㇻ
ne a=utek sisam utar　　その稼ぎ人たちが
サㇷ゚コパン　エネ　アン　ウェンプリ　アナㇰネ
"sapkopan ene an wen puri anakne　　「気が進まない。こんな悪いことは
ソモ　アコㇿ　クス　ネ　セコㇿ
somo a=kor kusu ne" sekor[75]　　やりたくない」と

---

[72]原典では、母親が雇い人たちに依頼して姉を殺させようという悪巧みを話しているのを妹が聞いた。
[73] ここは後妻の台詞なので、アサハ a=saha 「私の姉」の第一人称接辞は不要と思われる。
[74] 日本語の「板」を取り入れたものであるが、アイヌ語では和人の家の壁板や床板なども意味する。上田氏の日本語訳では単に「床」と言っている。
[75] 原典では、姉を埋めることに対して雇い人が拒否する文句はない。

ネ　アウテㇰ　シサㇺ　ウタㇻ
ne a=utek sisam utar　　その雇われた和人たちが
ハウェオカ、　ヒケ　カ
haweoka (a) hike ka　　言うことも
ヌ　ハウェ　カ　イサㇺノ
nu hawe ka isam no　　聞き入れずに
イチェン　アナㇰネ　ポロンノ、
〝icen anakne poronno (o)　　「お金はたくさん
アン　ペ　ネ　クス　イチェン　ポロンノ
an pe ne kusu icen poronno　　あるから、大金を
エチコレ　クス　ネ　ナ
eci=kore kusu ne na　　お前たちにやるつもりだよ。
タヌクランネ　ネ　アサハ
tanukurannne ne a=saha　　今夜、その姉を
ライケ　ワ　イコレ　ヤㇰ
rayke wa i=kore yak　　殺してくれたら
イチェン　ポロンノ　エチコレ　クス　ネ　ナ
icen poronno eci＝kore[76] kusu ne na〞[77]　　大金をやるつもりだからね」
セコㇿ　アウヌフ　ハウェアン　ハウェ
sekor a=unuhu hawean hawe　　と私の母さんが言う声を
アヌ　ワ　オラノ　マㇰ　イキアン　ワ
a=nu wa orano mak iki=an wa　　聞いて、私はどのようにして
アサハ　アシㇰヌレ　ㇷ゚　アン　セコㇿ
a=saha a=siknure p an sekor　　姉さんを助けようかと
ヤイヌアン　コㇿ　アナン　ヒ　クス　オラ
yaynu=an kor an=an hi kusu ora　　思いながらいた。そして
タネ、イペアン　カ　キ　アサ　カ　イペ
tane (i) ipe=an ka ki a=sa ka ipe　　今、私も姉さんも食事をした。
ヤイカタ　カ　イペアン　アクス　オラ
yaykata ka ipe=an akusu[78] ora　　自分も食事をすると
アサハ　ホッケ　ウシ　ウン
a=saha hotke usi un　　私の姉さんが寝床に

---

76 アチコレ acikore と聞こえるが、筆者の判断でエチコレ eci=kore と記した。
77 原典では、この場面で後妻が雇い人に対して大金を与えるという文句はない。次の殺害計画（生き埋め）の場面でその話題が出る。
78 ヤクス yakusu のようにも聞こえる。

エホッケ　ウン　アㇻパ、	
ehotke un??[79] arpa (na)	寝付き（？）に行った。
タヌクランネ　アサ　アライケ	
tanukaranne[80] a=sa a=rayke	今晩、姉さんが殺される
クニ　アラム　ヒ　クス　オラ	
kuni a=ramu hi kusu ora (a)	と私は思ったので
アプンノ　ソイェネアン　ヒネ	
apunno soyene=an hine	そっと外に出て
オラ　マチヤ　オッタ　アㇻパアン　ヒネ	
ora maciya or ta arpa=an hine	町に行って
アサハ…、　ネノ　カネ　パㇰノ	
a=saha (ne noy,) neno kane pakno	姉さんに似ている
ポロ、ポロ、にんぎょうさん	
poro, poro (o) NINGYOUSAN	大きな人形さんを
アホㇰ　ヒネ　オラ　アセ　ヒネ	
a=hok hine ora a=se hine	私が買って背負って
エカン　ヒネ　ヌイナ　アパ　オㇿ　ワ	
ek=an hine nuyna apa[81] or wa	来て、裏口から
アフナン　ヒネ、オラ	
ahun=an hine (e) ora	入ってから
アサ　タネ　ホッケ　ワ	
a=sa tane hotke wa	姉さんが今、横になって
モコㇿ　ワ　アン　ヒ　クス、	
mokor wa an hi kusu (u)	眠っているので
おしいれ　オルン　モコㇿ　ワ　アンケ　ア	
OSIIRE or un mokor wa an hike a	押入れへ、寝ているのを
アアニ　ヒネ　おしいれ　オッタ	
a=ani hine OSIIRE or ta	私がたないで押入れの中に
アヌイナ　ヒネ　オラ　ネ　アサ	
a=nuyna hine ora ne a=sa	隠してから、その姉さんが
ホッケ　ワ　アン　ふとん　オッタ	
hotke wa an HUTON or ta	寝ていた布団の中に

[79] 田村すず子『アイヌ語音声資料（1-6）語彙　上巻A-I』では「エホッケ　ヒ　ウン ehotke hi un arpa 」という用例がある。ここではヒ hi が聞こえないので解釈に迷っているところである。
[80] タヌクランニ tanukuranni とも聞こえるが、確認のために上田氏にゆっくり発音してもらうとタヌクランネ tanukuranne と発音したので、そのように記した。
[81] 上田氏の日本語訳ではヌイナ　アパ nuyna apa を「裏口」と言っているのでそれを引用している。

ネ　にんぎょうさん　アサ　ネノ　カネ	
ne NINGYOUSAN a=sa neno kane	あの人形さんを姉さんのように
アカㇻ　ヒネ　アホッケレ　ヒネ	
a=kar hine a=hotkere hine	見せかけて寝かせて
アアヌ　ヒネ　オラ　ヤイカタ　カ	
a=anu hine ora yaykata ka	おいてから自分も
ネ　おしいれ　オルン　アフナン　ヒネ	
ne OSIIRE or un ahun=an hine	その押入れに入って
ヌイナㇰアン　ヒネ　アナン　ルウェ　ネ	
nuynak=an hine an=an ruwe ne	隠れている
アクス　タネ　アンノㇱキ　オッタ	
akusu tane annoski or ta	と夜中になって
アプンノ　ネ　アウテㇰ　シサㇺ　ウタㇻ	
apunno ne a=utek sisam utar	そっとあの稼ぎ人たちが
アㇻキパ　ヒネ　ネ…、	
arkipa hine ne (ea,,,,)[82]	やって来て
アホッケレ　ワ　アン　にんぎょう	
a=hotkere wa an NINGYOU	私が寝かせた人形を
アサ　ネ　クナㇰ　ラム　パ　ワ	
a=sa ne kunak ramu pa wa	姉さんだと思って
レクチ　トゥイパ　パ　ヒネ　オラ	
rekuci tuypa pa hine ora	喉を切ってから
イタ　メㇱパ　パ　ヒネ　オロ	
ita mespa pa hine oro	板をはぎとって、そこに
オマレパ　ヒネ　オラ	
omarepa hine ora	皆で入れてから
ホシッパ　シリ　アヌカㇻ	
hosippa siri a=nukar	帰った様子を私は見た。
エアㇻキンネ　イヨクンヌレアン　アウヌフ	
earkinne iyokunnure=an a=unuhu	本当にあきれた私の母さんに
アコイルㇱカ　ア　アコイルㇱカ　ア　コㇿ	
a=koiruska a a=koiruska a kor	対して怒りに怒って
イヨクンヌレアン　コㇿ	
iyokunnure=an kor	私があきれはてて

[82] 原典では、後妻が雇い人と一緒に忍び寄って来るが、ここでは雇い人だけの行動として語られている。

アナン　ルウェ　ネ　アクス

an=an ruwe ne akusu　いると

ニサッタ　クネイワ　アナクス　オラ

nisatta kuneywa an akusu ora　明日の朝になって

スイ　ホシキ、　イホトゥイエカㇻ

suy hoski (i,,,) i=hotuyekar　また、先に私を呼んだ。

がっこう　オルン　パイェアン　クニ、

GAKKOU or un paye=an kuni (i)　学校へ私たちが行くように、

モイレアン　クナㇰ　イェ　コㇿ

moyre=an kunak ye kor　遅れるぞと言いながら

イホトゥイエカㇻ　ヒ　クス、

i=hotuyekar hi kusu (o)　私を呼ぶので

ホプニアン　ヒネ　エカナクス、

hopuni=an hine ek=an akusu (u)　起きてくると

アウヌフ　ネ　シネ　オッチケ　タクㇷ゚

a=unuhu ne sine otcike takup　母が一つのお膳だけ

カㇻ　ヒネ　アヌ　ヒ　クス、

kar hine anu hi kusu (u)　準備して置いたので

アサ　コㇿ　オッチケ、

〝a=sa kor otcike (e)　「姉さんのお膳が

イサㇺ　ルウェ　ネ　ヤクン　ヤイカタ　カ

isam ruwe ne yakun yaykata ka　ないのなら私も

イペアン　カ　ソモ　キ　クスネ　セコㇿ

ipe=an ka somo ki kusune〟sekor　食事なんかしないです」と

ハウェアナン　ルウェ　ネ　アクス　オラ

hawean=an ruwe ne akusu ora　私が言うと

アウヌフ　スイ　イポロウェン　コㇿ

a=unuhu suy iporowen kor　母さんがまた顔色を変えて

スイ　シネ　オッチケ　カㇻ　ヒネ

suy sine otcikekar hine　また、一つお膳を出して

トゥ　オッチケ　カㇻ、

tu otcike kar (a,)　二つのお膳を出した

ウパㇰノ　ウネノ　オカ　アエㇷ゚

upakno uneno oka aep　両方とも同じように食べ物を

オッチケ　オルン　オマレ　ヒネ

otcike or un omare hine　お膳に置いて

サンケ　ヒ　アヌカㇻ　ヒ　オラ
sanke hi a=nukar hi ora
出したのを私は見て

マㇰ　ネ　ヒネ、　クネイワ
‟mak ne hine (e) kuneywa
「どうして今朝は

アサハ、モソソ　ソモ　キ　ヒ　アン
a=saha mososo somo ki hi an″
姉さんを起こさないの？」

セコㇿ　アウヌ　エウン　アイェ　アクス
sekor a=unu eun a=ye akusu
と私が母さんに言うと

アサハ　レヘ　アヌ　ヒネ　ホトゥイェカㇻ
a=saha rehe a=nu hine hotuyekar
姉さんの名を聞いて呼ぶ

アクス　オラ　アサハ　ホプニ　ワ
akusu ora a=saha hopuni wa
と姉さんが起きて

エㇰ　ルウェ　ヌカㇻ　クス　オラ
ek ruwe nukar kusu ora
来たのを母さんが見て

エアㇻキンネ　エキマテㇰ　ノイネ　アン
earkinne ekimatek noyne an
ひどく驚いていました。

ウクランネ[83]　アライケ　ルウェ　ネ
‟ukuranne a=rayke ruwe ne
「夕べに殺された

クナㇰ　アラム　ワ　マカナㇰ　ネ　ヒネ
kunak a=ramu wa makanak ne hine
と思っていたのに、どうして

シㇰヌ　ワ　エㇰ　ルウェ　アン　セコㇿ
siknu wa ek ruwe an″ sekor
生きて来たのか？」と

ヤイヌ　キ　ノイネ　アン　ワ　オラノ
yaynu ki noyne an wa orano
思っているようだったので

アコイルㇱカ　ア　アコイルㇱカ　ア　コㇿ
a=koiruska a a=koiruska a kor
私はとても腹立たしくなって

オラ　スイ　ウトゥラアン　カネ　ヒネ
ora suy utura=an kane hine
また姉さんと一緒に

がっこう　オッタ　パイェアン　ヒネ
GAKKOU or ta paye=an hine
学校へ行って

オラノ　タㇷ゚ネ　ネ　ヒ　カ
orano tapne ne hi ka
から、このようなことを

アサ　エウン　アイェ　カ　アサ
a=sa eun a=ye ka a=sa
姉さんに言っても、姉さんを

[83] ウクランニ ukuranni とも聞こえる。ニは日本語の「〜に」の可能性もあるが、ネ neと解釈した。

アケㇺヌ　クス　タㇷ゚ネ　ネ　ヒ　カ	
a=kemnu kusu tapne ne hi ka	かわいそうに思ったのでわけも
アイェ　カ　ソモ　キ　ノ　ウトゥラアン　ワ	
a=ye ka somo ki no utura=an wa	言わずに一緒に
がっこう　オッタ　パイェアン　ヒネ	
GAKKOU or ta paye=an hine	学校へ行って
オラ　ホシピアン　ヒケ　カ　オラノ	
ora (a) hosipi=an hike ka orano	そして帰宅してもそれからは
ネウン　カ　アウヌフ	
(o) neun ka (a=oya,,,) a=unuhu	なんとか母さんが、
オラノ　アナㇰ　ネン カ　アサ　カㇻ	
orano anak nen ka a=sa kar	それからは姉さんに何かすること
クニ　カ　アオヤモㇰテ　カ　ソモ キ ノ	
kuni ka a=oyamokte ka somo ki no	のようにも思わないで
アナン　ルウェ　ネ　ア　ㇷ゚	
an=an ruwe ne a p	私は暮らしていたが、
スイ　ネン　カ　アオヤモㇰテ	
suy nen ka a=oyamokte (e)	また、どうも変だなと思った。
ネ　アウテㇰ　シサㇺ　ウタㇻ　トゥラノ	
ne a=utek sisam utar turano	その稼ぎ人たちと一緒に
ネㇷ゚　カ　ウコピヌピヌパ　ウコイソイタㇰパ	
nep ka ukopinupinupa ukoysoyyakpa	なにか囁きあって
ノイネ　アラム　コㇿ　アナン　ペ　ネ　クス	
noyne a=ramu kor an=an pe ne kusu	いるように思ったので
ピㇼカノ　アシルワンテ　ヒネ	
pirkano a=siruwante hine	しっかり辺りを注意して見て
アナン　ルウェ　ネ　アクス　オラ	
an=an ruwe ne akusu ora	いると
ネ　アウテㇰク　シサㇺ　ウタㇻ　エウン、	
ne a=utek sisam utar eun	あの稼ぎ人たちに
マチヤ　オッタ　パイェパ　ワ、	
(u, mat) 〝maciya or ta payepa wa,	「皆で町へ行って
ライクㇽ　オマレ　アオマレ、はこ	
(a) raykuromare a=omare (e) HAKO	棺おけを

ホㇰ　ワ　アㇻキパ　ヤㇰ　ピㇼカ　セコㇿ、
hok wa arkipa yak parka″ sekor,[84]　　買っておいで」と

ワ　ネ　ライクㇽ　オマ　はこ　オルン
wa 〝ne raykur oma HAKO or un　　「その棺おけに

タン、あね、むすめ　オマㇻパレ　ワ、
tan (A) ANE (E) MUSUME omarpare?? wa,　　この姉娘を入れて（？）

トイ　トゥㇺ　オマレ　ワ、ヤㇰネ
toy tum omare wa, yakne　　土の中に埋めて、そうしたら、

イチェン　アナㇰネ
icen anakne　　お金は

ネ　パㇰノ　エチコンルスイ　パㇰノ
ne pakno eci=kor rusuy pakno　　お前たちが欲しいだけの

イチェン…、アコレ　クス　ネ　ナ
icen (a=eci=,) a=kore kusu ne na″　　金をやるからな」

セコㇿ　アン　ペ　スイ　ハウェアン
sekor an pe suy hawean　　ということを再び言う

ハウェ　アヌ　ヒ　オラノ
hawe a=nu hi orano　　声を私は聞いて

イヨクンヌレアン　コㇿ　オラ
iyokunnure=an kor ora　　私は驚くと、それから

ネ　ライ、、はこ（アカㇻ、ア、）カㇻ
ne ray,, HAKO (a=kar, a) kar　　その棺おけを作る

シサㇺ　オッタ　アㇻパアン　ヒネ
sisam[85] or ta arpa=an hine　　和人のところに私が行って

ネ　はこ…、　シッケウェへ…
〝ne HAKO (o,,,) sikkewehe (e)　　「その棺おけの隅に

プヨマレパ　ワ　イコレ　ヤㇰ
puyomarepa wa i=kore yak　　穴を開けてくれたら

ピㇼカ　ナ　セコㇿ　ハウェアナン　ヒネ
pirka na″ sekor hawean=an hine　　いいなあ」と言って

エㇰ　ヒネ　オラ　ポロンノ
ek hine ora poronno　　来て、それからたくさんの

84 原典では、後妻自らが大工の所へ行って棺おけを注文している。
85 原典では日本語で HAKO DAIKU「箱大工（はこだいく）」と表現している。原典は本テキストに富較べて職業を日本語で表現する傾向が強い。

ノンノ　ピイェヘ、　カ　ポロンノ	
nonno piyehe[86] (e) ka poronno	花の種もたくさん
アホㇰ　ヒネ　エカン　ヒネ　オラ	
a=hok hine ek=an hine ora	買って来て
アサハ　エウン	
(as,,,) a=saha eun (a=e,,,)	姉さんに
アエライケ　クス　はこ　オㇿ	
〝a=e=rayke kusu HAKO or	「あなたが殺されるために棺おけに
アオマレ　ワ　キㇺ　タ　アエライケ…、	
a=omare wa kim ta a=e=rayke (en)	入れられて山であなたが殺され
ノイネ　ネ　クス、　タン、	
noyne ne kusu (ta) tan (HANA, HA)	そうなので、この
ノンノ　ピイェヘ　タン　ライクㇽ　はこ	
nonno piyehe tan raykur HAKO	花の種を、この棺おけ
オッタ…、　アオマレ　ヤㇰ	
or ta (aw, ayyom,,,) a=omare yak	に入れられたら
タン　プイ　カリ ネ　ノンノ　ピイェヘ、	
tan puy kari ne nonno piyehe	この穴を通して、その花の種を
プイ　カリ　ネ　ピイェヘ	
(e,e,) puy kari ne piyehe	穴を通して、その種を
エエトゥㇽセレ　エチャリ　コㇿ、	
e=etursere e=cari kor (o)	落として撒きながら
エアㇻパ　ヤクン　ネン　ポカ	
e=arpa yakun nen poka	行ったなら、なんとか
イキアン　ワ…、	
iki=an wa (a, aekaopi,,,)[87]	して、
カシ　アオピウキ　クス ネ ナ	
kasi a=opiwki kusu ne na〟	私が助けるからね」

[86] 原典では「エゾギク　タネ　一升」と花の名と量を言い、購入先も日本語でHANAYA「花屋」と表現している。和名のエゾギクは北海道では自生せず、観賞用に花壇に植えられている。通常、お銀小銀では妹から姉にケシの種が渡される。

[87] アオピウキ a=opiwki の言い損ないと推測する。また、原典では撒いた種がすぐに成長して花が咲き、それを目印に姉が埋められた場所へたどり着くことになっている。お銀小銀も花が咲く場面を語っているが、越年して春になってからのことが多い。上田氏の語りでは「花が咲く」という文言はない。上田氏は花の咲くのを待っていては生き埋めになった姉を助けられないと解釈してその箇所を省いた可能性がある。埋められた場所へ助けに行く期間が早いのは、本テキスト、原典、お銀小銀の順であり、救助の遅いものほど現実離れしている。

セコㇿ　ハウェアナン　チサン　コㇿ

sekor hawean=an cis=an kor　　と言った。私は泣きながら

ハウェアナン　オラ　ネ、ノンノ　ピイェヘ　カ

hawean=an ora ne (e) nonno piyehe ka　　言って、その花の種を

アコレ、　ヒネ　オラ　アサハ

a=kore, hin e ora a=saha　　あげて、それから姉さんが

ネ　ライクㇽ　はこ　オㇿ　アオマレ　ヒネ

ne raykur HAKO or a=omare hine　　その棺おけに入れられて

アウテㇰ　シサㇺ　ウタㇻ…、

a=utek sisam utar (a,,,)　　稼ぎ人たちが

エウコアンパ　ヘ　キ　パ　ヒネ

eukoanpa he ki pa hine　　それを皆で運んで

エキムン　パイェパ　シリ　アヌカㇻ　ワ

ekimun payepa siri a=nukar wa　　山へ行く様子を見て

オラノ　チサン　コㇿ　アサ

orano cis=an kor a=sa　　それから泣きながら姉さんを

アケㇺヌ　コㇿ　アナン　ヒ　クス　オラ

a=kemnu kor an=an hi kusu ora　　気の毒に思ってから

イシㇺネ　アウヌフ　エウン…、

isimne a=unuhu eun　　翌日、母へ

アウヌフ　ネウン　カ

(a,u,) 〝a=unuhu neun ka[88]　　「母さん、どこかに

シノッエアㇻパアン　ルスイ　クス

sinotearpa=an rusuy kusu　　遊びに行きたいから

アエㇷ゚　ピㇼカ　アエㇷ゚　パテㇰ、

aep pirka aep patek (e)　　食べ物を、美味しい食べ物ばかり

トゥ　オッチケ　カㇻ　ワ　イコレ　ヤクン

tu otcike[89] kar wa i=kore yakun　　二つのお膳をこしらえてくれたら

ネ、　アエㇷ゚　アセ　ワ

ne (e) aep a=se wa　　その食べ物を背負って

ネウン　カ　シネウェアン　ワ

neun ka sinewe=an wa　　どこかに遊びに行って

---

[88] 上田氏の和訳では「東京」と言っている。原典では行き先をトキヨ　ウン　アスチ TOKIYO un a=suci 「東京にいる祖母」と言っている。原典では、この場面から妹が生き埋めにされた姉のところまで行くまでを日本語で語り続けている。

[89] オッチケ otcike は「お膳」の意味であるが、上田氏の日本語訳では「ごっつぉ（ご馳走)」と言っている。また、二つを要求したのは「東京のおばさんと食べるから」と理由を言っている。

エカン　クス　ネ　ナ　セコㇿ
ek=an kusu ne na″ sekor　　来たいです」と
ハウェアナン　ルウェ　ネ　アクス
hawean=an ruwe ne akusu (u)　　言うと
アサ　イサㇺ　ペ　ネ　クス
a=sa isam pe ne kusu　　姉さんがいなくなったので
アウヌフ　エヤイコプンテㇰ　ペ　ネ　クス
a=unuhu eyaykopuntek pe ne kusu　　私の母さんは喜んで
ピㇼカ　アエㇷ゚　パテㇰ
pirka aep patek　　美味しい食べ物ばかり
トゥ　オッチケ　カㇻ　ヒネ
tu otcike kar hine　　二つのお膳を作って
イコレ　クス　オラ　ピㇼカ　アミㇷ゚　カ
i=kore kusu ora pirka amip ka　　くれたので美しい着物も
ピㇼカ　アミㇷ゚　アサ　ミ　アミㇷ゚　カ
pirka amip a=sa mi amip ka　　姉さんが着る着物も
ヤイカタ　アミ　アミㇷ゚　カ
yaykata a=mi amip ka　　自分が着る着物も
アセ　カネ　ヒネ　オラ
a=se kane hine ora　　私が背負って
ネ、　ピㇼカ　アエㇷ゚　カ
ne (e) pirka aep ka　　その美味しい食べ物も
アセ　ヒネ　ソイェネアン　ワ　オラノ
a=se hine soyene=an wa orano　　背負って外に出て
ソイ　タ　ソイェネアン　ヒネ　オラノ
soy ta soyene=an hine orano　　外に出てから
ネ、　アサハ、　アエウコアンパ　ワ
ne (e) a=saha (a) a=eukoanpa wa　　私の姉さんが運ばれて
アㇻパ、　ルコッ、　アオペㇱ　ヒネ、
arpa (a) rukot (a) a=opes hine　　行った細道に沿って下って
アㇻパアン　ヒネ　キㇺ　タ
(e) arpa=an hine kim ta　　行って、山に
アㇻパアン　ルウェ　ネ　アクス
arpa=an ruwe ne akusu　　行くと
シロウリ　オカ　アン　ヒ　アナㇰネ
sirouri oka an hi anakne　　土を掘った跡があるということは

テ　タ　アサ　トイトゥㇺ　アオマレ　ヒネ	
te ta a=sa toy tum a=omare hine[90]	ここに姉さんが埋められている
クニ　アラㇺ　ヒ　クス　オロ　タ	
kuni a=ramu hi kusu oro ta	と私は思ったので、そこに
アシケ、　アランケ　ヒネ　アクス	
a=sike (a) a=ranke hine akusu	自分の荷物を降ろすと
ネ　トイトゥㇺ　アオマレ、	
ne toy tum a=omare (e)	その地中に彼女が入れられた
トイ　カ　タ　ポロ　スマ　アン　ヒネ	
toy ka ta poro suma an hine[91]	地面の上に大きな石があって
ネ　スマ…、　アモイモイケレ　カ	
ne suma (a=o,) a=moymoykere ka	その石を動かすことも
アエアイカㇷ゚　ノ　ポロ　スマ	
a=eaykap no poro suma	出来ないで、大きな石を
カシ　タ　アヌㇷ゚　ネ　クス　オラ	
kasi ta anu p ne kusu ora	その上に置いてあるので
タネ、　エネ　ネ　ヒ　カ　イサㇺ　ア、	
tane (e) ene ne hi ka isam a,	今はどうすることも出来ませんでした。
アコㇿ　アサハ	
a=kor a=saha	私の姉さんを
（カシ　アオイピ、　アアオ、カシ、	
(kasi a=oypi, aao, kasi,	(言いよどみ)
ア、ン…、ア、アオイ、オイ、キ)	
a,n,,, a, aoy, oy,ki)	(言いよどみ)
カ、シ、ア、オ　ピウキ　クナㇰ	
kasi a=opiwki kunak	私が助けると
アイェ　ア　ㇷ゚、	
a=ye a p (a)	言っていたのでしたが
カシ　アオピウキ　エアイカㇷ゚　ヒ、	
kasi a=opiwki eaykap hi (i)	助けることもできないことを
アエラㇺアン　ヒネ　オラ	
a=eraman hine ora	思い知って

[90] 原典では姉の埋められたところをトゥシㇼ tusir「墓」と表現している。
[91] 上田氏の語りでは、姉の埋められている地面の上に大きな石が置かれているが、原典では地下に埋められた姉の棺おけの上に石も一緒に埋められており、石の位置が地上と地中にあつという違いがある。

オロ　タ、　パラパラㇰアン　コㇿ

oro ta, (a) paraparak=an kor　　そこで、私が泣きわめいて

アナン　ルウェ　ネ　アクス

an=an ruwe ne akusu　　いると

オロ　タ　ピㇼカ　ワ　オケレ

oro ta pirka wa okere　　そこにとても美しい

（カムイ　ヘネ　ヤ　アイヌ…）

(kamuy he ne ya aynu ha, a,)[92]　　（神様なのか、アイヌなのか）

カムイ　ヘ　シサㇺ　ヘ　ネ　ヤ…、

kamuy he sisam he ne ya (a)　　神様なのか、和人なのか

クㇽマッ　オロ　タ、　エクㇱコンナ

kurmat oro ta (p,or ta??) ekuskonna　　和人のご婦人がそこに突然、

イサㇺ　タ　アン　ヒネ　マㇰ　ネ　ヒネ

i=sam ta an hine[93] 〝mak ne hine　　私のそばに現れて、「どうして

エネ　エチㇱ　コㇿ　エアン　セコㇿ

ene e=cis kor e=an〟 sekor　　お前は泣いているのだい？」と

イコウウェペケンヌ　イ　クス

i=kouwepekennu hi kusu[94]　　私に尋ねたので

タㇷ゚ネ　カネ　アサ　トゥラノ

tapne kane 〝a=sa turano　　かくかくしかじかと「姉さんと一緒に

オカアン　ペ　ネ　ア　ㇷ゚

oka=an pe ne a p　　暮らしていましたが

ア、ウヌフ　ウェンサンペコㇿ　ワ、

a= (ao) unuhu wensanpekor wa　　私の母さんの根性が悪くなって

アオナハ　カムイまいりに　し…、

(a) a=onaha kamuy MAIRI NI SI,,,　　父さんが神様のお参りに

アㇻパ　エトㇰ　タ、　ピㇼカノ

arpa etok ta, pirkano　　行く前に「ちゃんと

アコㇿ　マッネポ　ウタㇻ

a=kor matnepo utar　　私の娘たちを

エプンキネ　ヒ　イェ　ア　イェ　ア　コㇿ

epunkine hi ye a ye a kor　　守れ」ということを何度も言って

---

92 「アイヌ」と言った直後、和人の散文説話であることを思い出し、次に「シサㇺ sisam 」と言い直したと思われる。

93 お銀小銀では、棺おけの上に石は置かれていないし、この石を動かすための援助者は現れない。しかし、上田氏も原典でも、「棺おけの上に石を置く埋め方」と「その石を動かす女神が現れる」というモチーフが付加される。

94 お銀小銀では現れない女神に対して、妹がこれまでの事情を説明することによって物語が長くなる。

アㇻパ　ア　ㇷ゚、　イサㇺ　アクス	
arapa a p（oy,,）isam akusu	出かけたのに、父さんがいなくなると
オラノ　アサハ　コレウェン　ワ	
orano a=saha korewen wa	それからは姉さんにひどい扱いをして
スㇽク　エレ　ヒケ　カ　ネ　スㇽク、	
surku ere hike ka ne surku（hu, u)	毒を盛ったときも、その毒の
べんとう　カ　アウㇰ　ワ　アオスラ　ワ	
BENTOU ka a=uk wa a=osura wa	おにぎりを私が取って捨てて
オポキン　パㇱクㇽ　エ　ワ	
opokin paskur e wa	次々にカラスが食べて
オポキン　パㇱクㇽ　カ　ライ　オラ	
opokin paskur ka ray ora	次々にカラスも死んで、それから
スイ　ライケ　クス　ホッケ、ウㇱケ　タ	
suy rayke kusu hotke（us,）uske ta	再び殺すために寝床で
レクチ、　トゥイパ　ワ	
rekuci（tuy,）tuypa wa	喉をかき切って
ライケパ　クナㇰ　イェ　ヒ　カ	
raykepa kunak ye hi ka	皆で殺そうということに
アエラㇺアン　ワ　ネ　ワ　アン　ペ　カ	
a=eraman wa ne wa an pe ka	私は気づいたので
にんぎょう　アホㇰ　ワ　エカン　ヒネ	
NINGYO a=hok wa ek=an hine	人形を買って来て
ネ　にんぎょう　アホッケレ　ワ、	
ne NINGYOU a=hotkere wa（a)	その人形を寝かせて
アウテㇰ　シサㇺ　ウタㇻ　アㇻキパ　ヒネ、	
a=utek sisam utar[95] arkipa hine（e)	稼ぎ人たちが来て
アサ　ネ　クナㇰ　ラムパ　ワ	
a=sa ne kunak ramupa wa	それを私の姉さんだと思って
レクチ　トゥイパ　ワ　オラ	
rekuci tuypa wa ora	その喉を切ってから
イタ　チョㇿポㇰ　オマレ　ラポッケ	
ita corpok omare rapokke	床下に入れたところ

[95] 原典では後妻の殺人計画を実行した雇い人のことを asinkaro utar あるいは asinkar utar と表現している。原典の表現は「身分の低い侍」を指すが、上田氏の表現では「稼ぎ人(使用人)」ということで意味が広く読み取れる。上田氏は足軽のことを別の散文説話ではアシンカル asinkaru と表現している。

アサ　アナㇰネ　モコㇿ　ワ　アン　ヒ　クス	
a=sa anakne mokor wa an hi kusu	私の姉さんは眠っていたので
おしいれ　オッタ　アヌイナ　ヒネ、	
OSIIRE or ta a=nuyna hine (e)	押入れに私が隠して
アアヌ　ㇷ゚　ネ　クス　アサ　ネ　クナㇰ	
a=anu p ne kusu a=sa ne kunak	おいたので、姉さんなのだと
ラムパ　ワ　レクチ　トゥイパ　ワ	
ramupa wa rekuci tuypa wa	思って彼らが喉を切って
イタ　チョㇿポクン　オマレパ　シリ　カ、	
ita corpon un omarepa siri ka (a)	床下に入れたこともあった
コㇿカ　オラノ　アナㇰネ、	
korka orano anakne (e)	けれども、それからは
ネノ　アラム　カ　ソモ　キ　ア　ㇷ゚	
neno a=ramu ka somo ki a p	どうも思わないでいたのでしたが
スイ、　ライクㇽ　アオマレ　はこ	
suy (i) ray (hat) kur a=omare HAKO	再び棺おけを
ホㇰパ　ワ　ヒネ　アウェンウヌフ	
hokpa wa hine a=wenunuhu	買って、私のひどい母親が
アウテㇰ　シサㇺ　ウタㇻ…、	
a=utek sisam utar (hok, ho, ahok,)	稼ぎ人たちに
ホㇰテパ　ヒネ　オラ　オロ　オマレパ　ワ	
hoktepa hine ora oro omarepa wa	買わせてそこに彼女を入れて
コㇿ　ワ　アㇻキパ　ヒネ　テタ	
kor wa arkipa hine teta	持って来て、先頃
トイトゥㇺ　オマレパ　ワ　アクス…、	
toytum omarepa wa akusu (kasi,,,[96])	土の中に入れて
アサ　エウン　ネン　ポカ　イキアン　ワ	
a=sa eun nen poka iki=an wa	姉さんをなんとかして
カシ　アオピウキ　クナㇰ　アイェ　アクス	
kasi a=opiwki kunak a=ye akusu	助けようと言うと
アエㇷ゚　ネ　ヤッカ　アミㇷ゚　ネ　ヤッカ	
aep ne yakka amip ne yakka	食べ物でも着物でも
アセ　カネ　ワ　エㇰアナ　ㇷ゚	
a=se kane wa ek=an a p	背負って来ましたが

[96] カシ　アオピウキ kasi a=opiwki の言いかけと思われる。

エネ　ポロ　スマ　アン　ワ　ネ　スマ	
ene poro suma an wa ne suma	こんな大きな石があってその石を
アモイモイケレ　カ　エアイカㇷ゚　ワ	
a=moymoykere ka eaykap wa	動かすことも出来ないので
チサン　コㇿ　アナン　ルウェ　ネ	
cis=an kor an=an ruwe ne"	泣いていたのです」
セコㇿ　ハウェアナン　ルウェ　ネ　アクス	
sekor hawean=an ruwe ne akusu	と私が言うと
ネ　カムイ　ネ　ノイネ　アン　メノコ	
ne kamuy ne noyne an menoko	その神様のような女が
ヤクン　アプス　クス　ネ　ワ　セコㇿ	
"yakun a=pusu kusu ne wa" sekor	「それなら、私が持ち上げるからね」と
ハウェアン　コㇿ　ネ、　スマ　カ	
hawean kor ne (i,) suma ka	言うと、その石を
コㇱネッポ　ネ　カㇻ　ヒネ	
kosneppo?? ne kar hine	静かに寄せて（？）[97]
スマ　カ　オスラ　ヒネ　オラ	
suma ka osura hine ora	石も捨てて
シル　ヒネ　アサ　トイ　カシ	
siru hine a=sa toy kasi	そこをこすって、姉さんの土の上の
トイ　ケ　ア　ケ　ア　ヒネ　アクス	
toy ke a ke a hine akusu	土を削って削ってしまうと
タネ　はこ　オンナイ　タ	
tane HAKO onnay ta	今、その棺おけの中で
アサ　ライ　ヒネ　アン　ルウェ　ネ　ヒネ	
a=sa ray hine an ruwe ne hine[98]	私の姉さんが死んでしまっていて
オラノ　オロ　タ　パラパラㇰアン　コㇿ	
orano oro ta paraparak=an kor	そこで私が泣いわめいて
アナン　ルウェ　ネ　アクス	
an=an ruwe ne akusu	いると

[97] モニターの指摘により「コㇱネ　プニ　カㇻ　ヒネ kosne puni kar hine（軽く持ち上げて）」から「コㇱネッポ　ネ　カㇻ　ヒネ kosneppo?? ne kar hine（静かに寄せて）」に修正した。kosneppo は奥田統己編『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集（CD-ROMつき）』札幌学院大学人文学部（1999）に一例記載されているが、副詞として「静かに（意味未詳）」とある。上田氏の日本語による語りでも「その石、寄せて」とあるので「持ち上げた」のではなく「そっと寄せた」と意味解釈した。

[98] 原典では、埋められた姉は腐って皮だけの状態で発見されたことになっている。

ネア　カムイ　ネ　ノイネ　アン　メノコ

nea kamuy ne noyne an menoko　　その神様のような女性が

オラ　レタㇻ　ポン　とっくり　オッタ

ora retar pon TOKKURI[99] or ta　　水色[100]の小さなビンに

レタㇻ　くすり　フレ　くすり

retar KUSURI hure KUSURI　　水色の薬と赤い薬の

ポン　とっくり、トゥㇷ゚　サンケ　ヒネ

pon TOKKURI (to) tup sanke hine　　小さなビンを二つ出して

オロワノ　アサハ、ミ　ワ　オカイペ　カ

orowano a=saha (a) mi wa okaype ka　　それから姉さんが着ていたものも

オピッタ　ウセ　アヌ　ヒネ

opitta use anu hine　　全部をふせて脱がせて

オスラ　ヒネ　オラノ　アサ

osura hine orano a=sa　　捨ててから姉さんを

ネ　くすり　アニ、コタチ　コㇿ

ne KUSURI ani (i) kotaci kor　　その薬で塗りつけて

フッサカㇻ　コㇿ、　コタチ　コㇿ

hussakar[101] kor (o) kotaci kor　　息を吹きかけながら塗りつけて

アナ　アイネ　ラポッケ

an a ayne rapokke (e)　　いると、そのうちに

アイヌ　ミントゥㇺ　コㇿ　アサ

aynu mintum kor a=sa　　人間の肉体を持った姉さんに

キ　コㇿ　アン　ラポッケ

ki kor an rapokke　　なっている間

ネ　くすり　ネ　クㇽマッ　ウシ

ne KUSURI ne kurmat usi　　薬をその和人の女性が塗るつける

トゥライラㇺ　ノ　アサ　シㇰマカカ　ヒネ

turayram no a=sa sikmakaka hine　　と同時に姉さんの目が開いて

ルウェ　ネ　ヒネ　オラノ

ruwe ne hine orano　　そうなってから

---

99 上田氏の日本語訳では「とっくり」を「ビン」と言っているのでそれに従った。原典では、女神が薬を塗ることは記されているが、薬が二色の入れ物に別々に入っていることは語られていない。

100 上田氏の日本語訳ではレタㇻ retar を「水色」と訳しているのでそれに従った。なお、フレ hure を「血色（ちいろ）」と語っている。

101 原典では、姉の全身に薬を塗ると肉が付きだして生き返る設定になっており、フッサカㇻは行っていない。上田氏の方がアイヌの文化的要素を取り込んでいるといえる。

タネ　アシㇰヌレ、シㇰヌ　ヒ、	
tane a=siknure, siknu hi,（a）	今、生き返らせたことを
アイェ　パ　ヒ　オラノ　アサ　セコㇿ	
a=ye pa hi orano〝a=sa〞sekor	言って「姉さん」と
ハウェアナン　コㇿ　パラパラㇰアン　オラ	
hawean=an kor paraparak=an ora	言いながら泣いて
アサ　カ　チㇱ　コㇿ、	
a=sa ka cis kor,（o）	姉さんも泣きながら
イコテッテㇾケ　ルウェ　ネ　ヒネ　オラノ	
i=kotetterke ruwe ne hine orano	私に跳びついて
アクス　ネ　カムイ　ネ　ノイネ	
akusu ne kamuy ne noyne	すると、その神様のような
アン　メノコ、　メノコ　イソイタㇰ、	
an menoko, menoko isoytak,（a, i）	女性が言った。
イヨモンヌレ　コㇿ、エネ　ハウェアニ	
i=omonnure kor（o）ene hawean hi	私をほめながらこのように言った。
アシヌマ　アナㇰネ、アイヌ　カ	
〝asinuma anakne, [102]（e）aynu ka	「私は人間では
ソモ　ネ　カムイ　アネ、	
somo ne kamuy a=ne,（e）	ない。私が神になった
カトゥ　アナㇰ　エネ　アニ	
katu anak ene an hi	のには、こんな事情があった。
タン　ホㇱキ　アコㇿ…、マッカチ…、	
tan hoski a=kor（meno,,,）matkaci,,,	この最初の私の娘は
ポサㇰアン　ワ　オラノ	
（u, po）posak=an wa orano	私が子供を持てないので
チュㇷ゚　カムイ　オルン　イノンノイタㇰアン	
cup kamuy or un inonnoytak=an	太陽の神様に祈っていた
ロㇰ　アイネ　アコㇿ　ペ、　アマッネポ	
rok ayne a=kor pe（ak）a=matnepo	あげくに持った私の娘、
シネ　マッネポ　タクㇷ゚	
sine matnepo takup	たった一人の娘を
アコㇿ　アㇷ゚　オラ　チュㇷ゚　カムイ	
a=kor a p ora cup kamuy	産んだのであるが、太陽の神様に

[102] 原典では、この女神の長い文句は全て日本語で語られている。

イカテオマレ　ヒネ　オラ	
i=kateomare[103] hine ora	私は好かれて
ポン　シイェイェ　ヒネ　ライアン　ワ	
pon siyeye hine ray=an wa	ちょっとした病気になって私が死んで
チュㇷ゚　カムイ　オッタ、　チュㇷ゚　カムイ、	
cup kamuy or ta (a) cup kamuy (i)	太陽の神様のところで太陽の神を
ホク　アコㇿ　ヒネ　アナン　ルウェ　ネ　ア	
hoku a=kor hine[104] an=an ruwe ne a	夫にしていた
コㇿカ　ネ　チュㇷ゚　カムイ　オㇿ　ワ、	
korka ne cup kamuy or wa,	が、その太陽の神から
アシッカㇱマレ　ヒネ	
(a, a,) a=sikkasimare hine	見守られて
アナン　ルウェ　ネ　アクス	
an=an ruwe ne akusu	いたのであると
エウヌフ　ネ　パㇰノ	
e= (a) unuhu ne pakno	お前の母親ほど
エウェンウヌフ　アナㇰネ	
e=wenunuhu anakne	ひどい母親は
ウェン、ウェンサンペコㇿペ、ネ　ㇷ゚	
wen, wensanpekorpe (e,) ne p	悪い根性を持っていても
オラ　エアニ　アナㇰネ　ピㇼカ　ケウトゥㇺ	
ora eani anakne pirka kewtum	お前は良い精神を
コㇿ　ペ　エネ　アン　ルウェ　アヌカㇻ　ワ	
kor pe e=ne an ruwe a=nukar wa	持っているのを私は見て
オラノ　ネン　ポカ　エウェンウヌフ	
orano nen poka e=wenunuhu	なんとかして、お前の悪い母親が
アマッネポホ　ライケ　クス　キ　ヤッカ	
a=matnepoho rayke kusu ki yakka	私の娘を殺そうとしても
アエチヤイヌレ、　クス	
a=eci=, (a) yaynure kusu	私がお前に思わせたので
ネ　スㇽク　ネ　ヤッカ　アエオスラ	
ne surku ne yakka a=e=osura	その毒であってもお前が捨てたのだ。

103 イカッイマレのようにも聞こえるが、一般的なアイヌ語辞典に記載された形で記した。
104 上田氏の語りでは、子供が欲しくて祈っていた太陽の神に惚れられたことになっているが、原典では祈った神は太陽の神であっても、その女に惚れて殺した神は、ちゃカムイ CA kamuy「蛇の神」であるという変移がある。

ネ　ネン　ネン　アヤイヌレ　アニ
na nen nen a=yaynure an hi
なんとかして私がそう思わせて

アマッネポホ　アシㇰヌレ　ヒ　ネ　クス
a=matnepoho a=siknure hi ne kusu
私の娘を生かせていたので

テワノ　アナㇰネ　ネ　エチウニ　ウン
tewano anakne ne eci=uni un
ここからお前たちが家に

エチホシッパ　ヤッカ、　スイ
eci=hosippa yakka (a) suy
帰ってもまた

エウェンウヌフ　ウェイサンペコㇿ　ワ
e=wenunuhu weysanpekor wa
お前のひどい母親が悪だくみをして

ウェン、ウェン　クス　エチホシッパ　カ
wen, wen kusu eci=hosippa ka
ひどいのでお前たちは帰ら

ソモ　キ　ノ、　タン　アミプ、
somo ki no (o) tan amip,
ないで、この服を

ピㇼカ　アミㇷ゚、　トゥ　アミㇷ゚
pirka amip (tu) tu amip
きれいな衣服を二着

テワノ　エチよめ　に、い、
(eci=,) te wa no eci=YOME NI (I)
これからお前たちが嫁さんに

ネ　ヤッカ　エチミ　ワ、
ne yakka eci=mi wa (a)
なってもお前たちが着て

だいじょうぶ…、パイェパ　クニ　ネ
DAIJOUBU,,, payepa kuni ne
安心して行けるように

ネ　アミㇷ゚　カ　アコㇿ　ワ
ne amip ka a=kor wa
その着物も私が持って

エカン　ルウェ　ネ　クス　ウサ　ウサ
ek=an ruwe ne kusu usa usa
来たのだから、めいめいに

エチミ　ワ　エチセ　ワ
eci= (i) mi wa eci=se wa
お前たちが着物を着て、背負って

テワノ　マチヤ　オルン　スイ
tewano maciya or un suy
ここから町へ再び

エチサッパ　ヤㇰ　ピㇼカ
eci=sappa yak pirka
下りて行くとよい。

ネイ　パㇰノ　ネ　ヤッカ　エチオナハ
ney pakno ne yakka eci= (i,o) onaha
いつまでも父さんを

エチパ　パㇰノ　アナㇰネ
eci= (i,) pa pakno anakne
お前たちが見つけるまでは

エチエプンキネ　クス　ネ　ナ　セコㇿ	
eci=,,, epunkine kusu ne na″ sekor	守るつもりだからね」と
ネ　カムイ　メノコ　ハウェアン　コㇿ	
ne kamuy menoko　hawean kor	その女神が言いながら
ピㇼカ　アミㇷ゚　サンケ　ヒネ	
pirka amip sanke hine	美しい着物を出して
イコレ　ヒネ　オラ　ネ　アセ　ヤ、	
i=kore hine ora ne a=se ya (a)	くれて、それを背負うとか、
アエㇷ゚、ピㇼカ　アエㇷ゚　カ　オロ　タ	
aep, pirka aep ka oro ta	食べ物を、美味しい食べ物をそこに
アサンケ　ヒネ　ネ　カムイ　メノコ　カ	
a=sanke hine ne kamuy menoko ka	私が出して、その女神も
トゥラノ　レン　アネ　ヒネ　アエ　ネ　ヤ	
turano ren a=ne hine a=e ne ya	一緒に三人で食べるとか
キ　オラノ　イコプンテㇰ　ア　イコプンテㇰ　ア	
ki orano i=kopuntek a i=kopuntek a	して、とても喜ばれた。
ネア　カムイ　メノコ　キ　ヒネ　オラ、	
nea kamuy menoko ki hine ora	その女神も喜んで
イペアン…、ネ　ヤ　キ　オラ	
ipe=an (iku,) ipe=an ne ya ki ora[105]	食事やらをしてから
テワノ　エチサㇷ゚パ　ヤクン　スイ、	
〝tewano eci=sappa yakun suy (i)	「ここから下がったら、また
ポンノ　エチシトマ　ㇷ゚　アン　コㇿカ	
ponno eci=sitoma p an korka	お前たちは少し怖い目にあうけれども
オロ　タ　カ　エチアエプンキネ	
oro ta ka eci=a=epunkine	そこでも私がお前たちを守る
クス　ネ　ナ…[106]	
kusu ne na″ (a,,, ne na)	つもりだからね」
セコㇿ　ハウェアン　コㇿ	
sekor hawean kor	と言うと
タネ　テ　パㇰノ…、　テ　タ	
〝tane te pakno (eci=e) te ta	「今まではここで

105 原典では、ここで食事が始まる場面の前に女神が消えている。
106 女神はこれ以降では姿を見せないが、関所のようなところで姉妹が簡単に通行許可を与えられるように侍たちを操ったと考えられる。

イヌカㇻ、　エチイヌカㇻ
i=nukar, eci=i=nukar　　お前たちに私のことを見せた。
エチアヌカㇻ　カ　キ　ヒ
eci=a=nukar ka ki hi　　お前たちに見せていたが
オラノ　イマカケ　タ　アナㇰネ　エネ
orano imakake ta anakne ene　　これから先はこのように
エチイヌカㇻ　カ　ソモ　キ　ナンコㇿ
eci=i=nukar ka somo ki nankor　　私をお前たちは見ることはないだろう
クス　ピㇼカノ、　トゥン　ネ　ワ
kusu pirkano (u) tun ne wa　　から、仲良く二人して
ウウェプンキネパ　ヤㇰ　ピㇼカ　ナ
uwepunkinepa yak pirka na″　　助け合うのだよ」
セコㇿ　ネ　カムイ　メノコ
sekor ne kamuy menoko　　とその女神が
ハウェアン　コㇿ　クリパンテㇰ　ヒネ
hawean kor (o) kuripan tek hine[107]　　言うと、さっと消えて
イサㇺ　ルウェ　ネ　ヒネ　オラノ、
isam ruwe ne hine orano (o)　　いなくなって
ヤイライケアン　ヒ…、アイェ　コㇿ
yayrayke=an hi (a,hi,i,a,) a=ye kor　　私たちが感謝のことばを言って
オラ　アサ　トゥラノ　スイ、
ora a=sa turano suy, (u, si)　　それから姉さんと一緒にまた、
アエヤイコプンテㇰ　ペ　アサ　アパ　ワ
a=eyaykopuntek pe a=sa a=pa wa　　私が嬉しいもの、姉さんを見つけて
トゥラノ、　アㇷ゚カサン　ヒ
turano (a, ar) apkas=an hi　　一緒に歩けることを
アエヤイコプンテㇰ　コㇿ
a=eyaykopuntek kor　　喜びながら
ピㇼカ　アウㇱ　ペ　ネ　ヤッカ
pirka a=us pe[108] ne yakka　　立派な履き物であっても
ネ　クㇽマッ　イコレ　ㇷ゚　ネ　クス
ne kurmat i=kore p ne kusu　　和人の女性がくれたので

---

107 このような形で消えていなくなる現象をアイヌはオハインカㇻ ohainkar「幻視する」(一項動詞) という。上田氏によると、夢見で託宣を受けることも同じ意味であるという
108 原典では、日本語で履き物を GETA、丹前をSANZEN、笛を HUE、着物を KIRUMONOと表現し、それらを風呂敷 HUROSIKI に包んでいることを述べている。

ピㇼカ　アウㇱ　ペ　カ　アウㇱ　カネ　ヒネ
pirka a=us pe ka a=us kane hine　　美しい靴をはいて

オラ　シノタン　コㇿ　エタㇻカ、
ora sinot=an kor etarka (a)　　それから遊びながら適当に

マチヤフナラアン　クス…、
maciyahunara=an kusu (sap, kusu)　　町を探すために

アㇷ゚カサン　ルウェ　ネ　アクス、
apkas=an ruwe ne akusu (i)　　私たちが歩いて行った結果、

ヒナㇰ　タ　カ　パイェアン　ルウェ　ネ　アクス
hinak ta ka paye=an ruwe ne akusu　　どこかにか着くと

タンネ　イヨッペ　コㇿ　カネ　オカ
(u) tanne iyokpe kor kane oka　　長い鎌を持っている

シサㇺ　ウタㇻ　インネ　シサㇺ　オカ　ヒネ
sisam utar inne sisam oka hine[109]　　和人たちがたくさんの和人がいて

オラ　エネ　ハウェオカ　ヒ
ora ene haweoka hi　　このように言った。

テ　ワノ　アナㇰネ　ネン　カ…、
〝te wano anakne nen ka (a)[110]　　「ここからは誰も

アッカリレ　カ　ソモ キ　クス
a=akkarire ka somo ki kusu　　通させないために

オカアン　ルウェネ　クス、
oka=an ruwe ne kusu (u)　　俺たちはいるのだから

アッカリレパ　ソモ　キ　クス　ネ　ナ
a=akkarirepa somo ki kusu ne na〟[111]　　通しはしないぞ」

セコㇿ　ハウェオカパ　コㇿ
sekor haweokapa kor　　と言いながら

ネ　イヨッペ　エシスイパ　ヒケ　カ
ne iyokpe esisuypa hike ka　　その鎌を振り回しているときも

タㇷ゚ネ　タㇷ゚ネ　ネ　ワ
tapne tapne ne wa　　かくかくしかじかと

---

109 ここでの長い鎌を持った和人たちの姿を、原典では sapaha ta paskur rew rok pe kor oka sisam 「頭にカラスが留まっている和人」という「侍」を表現する常套句で語っている。鎌の長さはテㇺ　パクノ tem pakno（約150cm）と語っており、上田氏は鎌を持った人たちを「たくさん」としているが原典ではSAMURAI ROKUNIN「侍６人」とより具体的に語っている。

110 原典では、鎌を持った和人が「通さないぞ」という文句はなく、もっと簡単に通行が許可されている。

111 物語の前半で「学校」や「先生」という現代的なことばが現れていたが、この場面ではまるで時代劇の「関所」や「侍」が現れるので、時代背景がわかりにくい。いろいろな時代の話とことばが合体して創られている。

ヤイケウコㇿアン　ワ	
yaykewkor=an　wa	私たちが苦労して
アㇻキアン　ペ　ネ　ルウェ　ネ　ヒ	
arki=an pe ne ruwe ne hi	来た者であること
アイェ　ルウェ　ネ　アクス	
a=ye ruwe ne akusu	を話すと
ヤクン　エチパイェパ　ヤㇰ	
〝yakun (u) eci=payepa yak	「それならばお前たちは行くと
ピㇼカ　セコㇿ　ハウェオカパ　コㇿ	
pirka〟 sekor haweokapa kor	よい」と言いながら
オロ　タ　カ　オラ　ネ　シサㇺ	
oro ta ka ora ne sisam	そこでもその和人が
イヨッペ　コㇿ　シサㇺ　ウタㇻ	
iyokpe kor sisam utar (a, i,)	鎌を持った和人たちが
イクㇱテ　パ　ヒネ　オラ	
i=kuste pa hine ora	私たちを通してくれて
サパン　ヒネ　アクス	
sap=an hine akusu	下がって行くと
インネ　マチヤ　アン　ヒネ	
inne maciya an hine	にぎやかな町があって
ネ　マチヤ　オッタ　アㇻパアン	
ne maciya or ta arpa=an	その町に私たちが行く
ルウェ　ネ、　アクス…	
ruwe ne (a,) akusu (kotan,,,)[112]	と
ネ　マチヤ　ノㇱキ　タ、	
ne maciya noski ta, (si,)	その町の真ん中に
ポ　ヘネ　シ　ポロ　マチヤ　アン　ヒネ	
po hene si poro maciya an hine	なおいっそう大きな町があって、
ネ　マチヤ　オッタ　パイェアン	
ne maciya or ta paye=an	その町に私たちは行った。
(パイェアン　でない)	
(paci, paye=an DENAI)	(言いよどみ)

112 上田氏はマチヤ maciya 「(和人の) 町」というべきところをコタン kotan「集落」と言い違えたので、すぐに言い直したと思われる。平石清隆「大阪で続けたアイヌ語〜ウウェペケㇾとチコㇿナイ・アイヌ語学習〜」『平成18年度　普及啓発セミナー報告集』(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構、(2007) に、上田氏は日本人の住む村をマチヤ、アイヌの住む村をコタンと厳密に区別して表現していたというエピソードが紹介されている。物語中で「旦那さん」が和人であればトノ、アイヌであればニㇱパと一般的に表現する傾向と似ている。

ネ　ポロ　チセ　オッタ…、

ne poro cise or ta (arpa=an)[113]　　その大きな家のところに

パイェアン　ルウェ　ネ　アクス

paye=an ruwe ne akusu　　私たちが行くと

オロ　タ　シサㇺ　オッカイポ　ウタㇻ、

oro ta sisam okkaypo utar (ha)　　そこに和人の青年たちが

ソイェンパ　ヒネ、　シニアン　ヤㇰ

syenpa hine (i) "sini=an yak　　外に出て来て「休むと

ピㇼカ　ピㇼカ　セコㇿ　イェ　パ　ヒネ

pirka parka" sekor ye pa hine　　よいよい」と言って

アシケヘ　カ、　イコッパ　ヒネ

a=sikehe ka (i) i=korpa hine　　私たちの荷物を持ってくれて

アテケ　アニ　ヒネ　オラ

a=teke ani hine ora　　手を引いて

(ネ　ポ、ポロ　チセ　マッ)

(ne po, poro cise mat??)　　(その大きな家…)

シ　ポロ　チセ　オッタ

si poro cise or ta　　大邸宅に

アフㇷ゚アン　ルウェ　ネ　アクス、

ahup=an ruwe ne akusu (u)　　入って行くと

カムイ　トノ　アオナハ

kamuy tono a=onaha　　立派な旦那さんが、私たちの父さん

ネノ　カネ、　ネノ　カネ　アン

neno kane, neno kane an　　によく似ている

シサㇺ　トノ　アン　ヒネ　オラ

sisam tono an hine ora　　和人の旦那さんがいて

ホクレ　ホクレ、　アフㇷ゚アン　ヤㇰ

"hokure hokure (e) ahup=an[114] yak　　「さあさあ、入るが

ピㇼカ　ピㇼカ　セコㇿ　アイェ　コㇿ

pirka parka" sekor a=ye kor　　よいよい」と言われて

---

[113] アㇻパアン arpa=an と単数形で言った後、すぐに複数形で言い直している。原典では、姉妹は最初にヤドヤ YADOYA「宿屋」に行き、親方に風呂焚きや庭掃除させてくれと頼んで「ZOCUU (女中)」として雇われている。

[114] モニターの指摘により聞き直し、「アフッパ ahuppa」から「アフㇷ゚アン ahup=an」に修正した。アフㇷ゚　ヤン ahup yan (入りなさい) の可能性もあるが不詳。

シサㇺ　オッカイポ　ウタㇻ	
(wen)[115]　sisam okkaypo utar	和人の若者たちが
アテケ　アニパ　ネ　ヤ	
a=teke anipa ne ya	私の手を持ったり
ナニ　ネン　ネン…、	
nani nen nen (ahu,)	すぐにどうにかこうにか
アフㇷ゚アン　ルウェ　ネ　ヒネ	
ahup=an ruwe ne hine	私たちが入って
オラノ　ネ　オロ　タ　アナン　ワ　オラ	
orano ne oro ta an=an wa ora	それからそこに私たちがいたら
ネウン　カ　パイェアン　ソモ　キ　ノ	
“neun ka paye=an[116] somo ki no	「どこへも行かないで
テ　タ　オカアン　ヤㇰ　ピㇼカ	
te ta oka=an yak parka”	ここで暮らしたらいい」
セコㇿ　ネ　アオナ　ネノ　カネ　アン	
sekor ne a=ona neno kane an	と私たちの父さんに似た
シサㇺ　カムイ　トノ　ハウェアン　ワ	
sisam kamuy tono hawean wa	和人の旦那さんが言って
オラノ　オロ　タ　アナン　ヒネ　オラノ	
orano oro ta an=an hine orano	それから、そこに私たちが暮らして
アエヤイコプンテㇰ　アサ　トゥラノ	
a=eyaykopuntek a=sa turano	喜んで姉さんと一緒に
アナン　ペ　ネ　クス　ネㇷ゚　アカㇻ　ヤッカ	
an=an pe ne kusu nep a=kar	暮らしていたので何をするのも
ウトゥラ　カネ　アナン　ワ　アカㇻ	
yakka utura kane an=an wa a=kar,	一緒になって作った。
ネㇷ゚　カ　アエㇷ゚　ネ　ヤッカ…、	
nep ka aep ne yakka (a, uu,, u)	なにか食べ物であっても、
ウパㇰノ　ウネノ　アイエレ、	
upakno uneno a=i=ere (p,)	同じように食べさせられ
ペ　ネ　クス、　イペ　ネ　ヤッカ	
pe ne kusu (u) ipe ne yakka	たので、食事でも

[115] ウェン　シサㇺ wen sisam「悪い和人」と聞こえるが、上田氏の日本語訳では逆に「良い和人」のように語られているので、カタカナと和訳は筆者がウェン（悪い）ということばを省いた。
[116] ここの文句は和人の旦那さんが姉妹に対して述べているので、エチパイェ eci=paye（お前たちが行く）」、「エチオカ eci=oka（お前たちがいる）」という人称接辞を付けるべきと思うが、二度も続く現象なので聞こえたままを記した。

イク　ネ　ヤッカ　ネㇷ゚　ネ　ヤッカ
iku ne yakka nep ne yakka　　酒を飲むのでもなんでも
アエシㇼキラㇷ゚　カ　ソモ　キ　ノ　オラ
a=esirkirap ka somo ki no ora　　私たちは心配もしないで
ナ　ネン　ネナン　シサㇺ　オッタ　ネ　クス
na nen nen an[117] sisam or ta ne kusu　　いろいろな和人のところなので
ネㇷ゚キアン　コㇿ　アナン　ア　コㇿカ
nepki=an kor an=an a korka　　私たちは働いていたが
シネアンタ　エイタサ　タネ　オホンノ
sineanta 〝eytasa tane ohonno　　ある日、「ずっと今までしばらく
アナン　ヒケ　カ　アㇷ゚カサン　カ
an=an hike ka apkas=an ka　　暮らしていたけれども出歩きも
マチヤ　ヌカラン　カ　エラミㇱカリ
maciya nukar=an ka eramiskari　　町を見ることもしなかった
クス、シネウェアン　ルスイ　セコㇿ
kusu (u) sinewe=an rusuy〟 sekor　　ので私たちは遊びに行きたいです」と
カムイ　トノ　エウン　アイェ　アクス
kamuy tono eun a=ye akusu　　旦那さんに言うと
ソンノ　ネ　セコㇿ　ハウェオカパ　コㇿ、
〝sonno ne〟 sekor haweokapa kor (u)　　「そうだったな」と言って
シネウェアン　ヤッカ　ピㇼカ　ピㇼカ
〝sinewe=an??[118] yakka pirka parka〟　　「遊びに行ってもよいよい」
セコㇿ　アイイェ　ヒ　クス　オラ
sekor a=i=ye hi kusu ora　　と言われたので
トゥン　アネ　ヒネ　ソイェンパアン　ヒネ
tun a=ne hine soyenpa=an hine　　二人で外出して
アㇷ゚カサン、コㇿ　アヌカㇻ　アクス[119]
apkas=an (as,) kor a=nukar akusu　　歩きながら見ると
ポロ　シケ　カネ　キ　シサㇺ
poro sike kane ki sisam　　大きな荷物を背負った和人が

[117] モニターの指摘により「nen nen sisam」から「nen nen an sisam」に修正した。田村すず子『アイヌ語沙流方言辞典』草風館（1996）に「nen nen oka ネン　ネン　オカ　いろいろな（いやな／へんな）」とある。嫌な和人もいたということであろうか。
[118] 上田氏の日本語訳では「ゆっくり遊んで来い、遊んで来い。」と述べている。なぜ、第一人称接辞で述べるのかは不詳。
[119] 実際には「アヌ、カンラクス」と似た音に聞こえる。

イエカリ　エㇰ　コㇿ　アン　シリ	
i=ekari ek kor an siri	私たちの方へ向かって来る様子を
エトクン、　アヌカㇻ　コㇿ、	
etokun (a) a=nukar kor (o)	先に私が見ながら
マチヤ、　オペㇱ、　アキ　コㇿ	
maciya (o) opes (he) a=ki kor	町並みに沿って下って行って
アナン　ルウェ　ネ　アクス	
an=an ruwe ne akusu	私たちがいると
ネア　ポロ　シケ　キ　ヒネ	
nea poro sike ki hine	大きな荷物を背負って
エㇰ　シサㇺ　サマ　タ	
ek sisam sama ta	来る和人のそばに
アㇻパアン　ルウェ　ネ　アクス	
arpa=an ruwe ne akusu	私たちが行くと
アオナハ　ネ　ヒネ　オラ	
a=onaha ne hine ora	私たちの父さんだったので
アエキマテㇰ　カ　キ	
a=ekimatek ka ki	驚いた。
アオナハ…、　アヌカㇻ　クニ	
a=onaha (n,,,) a=nukar kuni	私の父さんを見るとは
アラム　カ　ソモ　キ　ノ	
a=ramu ka somo ki no	思いもしなかったので
アㇷ゚カサン　ワ　アオナハ　アヌカㇻ　ワ	
apkas=an wa a=onaha a=nukar wa	私たちは歩いて父さんを見て
オラ　ネ　アオナハ　カ　ヒナㇰ　ワ	
ora ne a=onaha ka 〝hinak wa	それから父さんも「どこから
アマッネポ　ウタㇻ　エネ	
a=matnepo utar ene	私の娘たちがこうして
トゥン　ネ　ヒネ　オカ　ルウェ　ネ　ヤ	
tun ne hine oka ruwe ne ya	二人でいるのか？
ネア　アコㇿ、アマッネポ　ソモ　ネ	
nea a=kor, a=matnepo somo ne〟	あの私の、私の娘ではない・・・」
セコン　ネ　ヒネ、　ネ　ルウェ　ネ　ヒ	
sekor ne hine ne, ruwe ne hi	ということを
アイイェ　オラ　マㇰ　ネ　ルウェ　ネ　ヤ	
a=i=ye ora 〝mak ne ruwe ne ya〟	言われて、「どういうことなのだ？」

イコイペケンヌ　クス　タㇷ゚ネ　タㇷ゚ネ　ネ　ワ
i=koypekennu kus u tapne tapne ne wa　　と訊ねたので、こういうわけで
アサさ、はは、　アウェンウヌフ
“a=sa SA　HAHA, a=wenunuhu　　「姉さんに、悪い母さんが
スㇽク　エレ　クスネ　ヤッカ、
surku ere kusune yakka,　　毒を盛るつもりでも、
アシㇰヌレ　オラ　トイ　トゥㇺ
a=siknure ora toy tum　　私が助けて土の中に
アオマレ　ヒケ　カ　アシㇰヌレ
a=omare hike ka a=siknure　　埋められても私が助けました。
にんぎょうさん　に、レクチ　トゥイェ
NINGYOUSAN NI, rekuci tuye　　人形さんの喉を切ろう
クス　ネ　ヤッカ　ネ　ヒ　タ　カ
kusu ne yakka ne hi ta ka　　としても、そのときも
アシㇰヌレ　ワ　オラ　トゥン　アネ　ヒネ、
a=siknure wa ora tun a=ne hine (e)　　私が助けて二人して
カムイ　イカ　オパㇱ　クスケライポ
kamuy i=ka opas kusukeraypo　　神様のおかげで
シㇰヌアン　ワ　アㇻキアン　ルウェ　ネ　ヒ
siknu=an wa arki=an ruwe ne″ hi　　生きて来られた」ということを
アイェ　アクス　オラノ
a=ye akusu orano　　私が話すと
アオナハ　イルㇱカ　ア　イルㇱカ　ア
a=onaha iruska a iruska a　　私の父さんがとても怒る
コㇿ　オラノ　アオナ　トゥラノ　オラ
kor orano a=ona turano ora　　とそれから父さんと一緒に
ネア、　カムイ　トノ　オッタ
nea (a) kamuy tono or ta　　あの立派な旦那さんのところに
アㇻキアン　ヒネ　オラノ　カネ
arki=an hine orano kane　　来てそれから
カムイ　トノ　オッタ　ウネノ
kamuy tono or ta uneno　　旦那さんのところで同じような
カムイ　トノ　ネ　クス　イヤイライケ　ヒ
kamuy tono ne kusu iyayrayke hi　　立派な紳士なので感謝のことばを
イェ　ア　イェ　ア　アマッネポ　ウタㇻ、
ye a ye a a=matnepo utar (a)　　重ねて言って、自分の娘たちが

アシㇰヌレ　イペレ　イクレ、	
a=siknure ipere ikure (re)	生かされて飲み食いさせて
アレウシレ　ワ、　アナン　ヒ、	
a=rewsire wa (a) an=an hi (i)	泊めらさせていたことを
ネ　アオナハ　イェ　コㇿ	
ne a=onaha ye kor	私の父さんが言いながら
イヤイライケ　ヒ　イェ　ア　イェ　ア	
iyayrayke hi ye a ye a[120]	感謝のことばを何度も言って
コㇿ　オラ…、	
kor ora (hosi,,, tane ho,)[121]	それから
イネヘンパㇰ　ト　カ　レウシアン　コㇿ	
inehenpak to ka rewsi=an kor	何日か泊まって
アナン　ア　コㇿカ　タネ	
an=an a korka tane	いたけれども今は
アオナハ　イルㇱカ　ㇷ゚　ネ　クス	
a=onaha iruska p ne kusu	父さんが怒ったので
ホシピ、ウニ　ウン　ホシピ　クナㇰ	
hosipi, uni un hosipi kunak	帰る家に帰ると
イェ　コㇿ　オラノ　アトゥラ　ヒネ	
ye kor orano a=tura hine	言ってから連れられて
アㇻキアン　ヒネ　アオナハ　と	
arki=an hine a=onaha TO	来て、父さんと
ネ　レン　アネ　ヒネ　オラノ	
ne ren a=ne hine orano	三人でそれから
ナ　ネン　ネン　ヒ　ハウェオカアン　コㇿ	
na nen nen hi haweoka=an kor	いろいろ話しながら
アㇻキアン　ヒネ　アコㇿ　マチヤ　オッタ	
arki=an hine a=kor maciya or ta	来て、私らの町に
アㇻパアン　カ、シレパアン　アクス	
arpa=an ka (pa,) sirepa=an akusu	行って着くと

[120] 原典では、姉妹の父親が宿屋の親方にお礼の「poro KANE（大金）」を渡そうとする場面があるが、本テキストでは省かれている。小さな変移であるが、金の話題がなくなることで、よりアイヌ化する箇所と筆者は考える。
[121] タネ　ホシピ tane hosipi 「今は帰った」と言いかけたと思われる。

アオナハ　エネ　ハウェアニ	
(u) a=onaha ene hawean hi[122]	父さんはこのように言った。
エチオカ　アナㇰネ…、	
〝ecioka anakne (e,,,i,,,i)	「お前たちは
イトゥラ　ノ　エチアフッパ	
i=tura no eci=ahuppa	私と一緒に入ら
ソモ　キ　ノ　アエヌイナ　クス　ネ　ナ	
somo ki no a=e=nuyna[123] kusu ne na〟	ないで私が隠すつもりだぞ」
セコㇿ　ハウェアン　コㇿ	
sekor hawean kor	と言うと
ポロ　たんす　アン　ぺ　ネ	
poro TANSU an pe ne	大きなタンスがあったので
たんす　オッタ　トゥン　アネ　ヒネ	
TANSU or ta tun a=ne hine	タンスの中に私たちが二人で
イオマレ　ヒネ　オラ	
i=omare hine ora	入れられてから
アオナ　プイネ　オラ　アㇻパ	
a=ona puyne ora arpa	父さんが一人で行った。
オラ　ネ　カムイ　トノ、スイ　イソイタㇰ	
ora ne kamuy tono (i) suy isoytak (a)[124]	それから旦那さんが再び話した。
アマッネポ　ウタリ　アヌイナ　ヒネ　オラ、	
a=matnepo uteri a=nuyna hine ora (a)	私は娘たちを隠して
アウニ　タ　エカン　ヒネ　アクス、	
a=uni ta ek=an hine akusu (u)	自分の家に来ると
トノ　アネ　ㇷ゚　ネ　クス　ネ…、	
tono a=ne p ne kusu ne (e,i,ie,)	私が主なので、その
アパマカアン　パ　ワ、	
apamaka=an pa wa (ahup=an)[125]	戸を開けて
アフナン　ルウェ　ネ　アクス	
ahun=an ruwe ne akusu	入って行くと

[122] 原典では、父親が娘たちをタンスに隠す前に、娘たちの欲しいものを買ってきて与えている。姉は「赤いタスキ」、妹は「赤いカンザシ」を買ってもらった。上田氏はこのモチーフを語っていないが、「赤」という色を表すことばは女神が姉の治療に用いた薬の色として現れている。
[123] モニターの指摘により「a=i=nuyna」から「a=e=nuyna」に修正した。その場合、ここは「a=eci=の形になるべき？」という可能性も教示されているが不詳。
[124] 妹の一人称叙述から、父親の一人称叙述に切り替わることを表している。原典でも父親の一人称で叙述されている場面であるが、そこには叙述者が切り替わることを宣言するような文句はない。
[125] 複数形で言ってしまったので、次に単数形で言い直している。

ネア　アマチヒ、　アプンノ	
nea a=macihi (hi) apunno	例の私の妻が無事に
ホシピアニ　エヤイコプンテㇰ　ワ	
hosipi=an hi eyaykopuntek wa	私が帰って来たことを喜んで
ミナ　カネ、　ワ　イエカリ	
mina kane (e) wa i=ekari	笑いながら私に向かって
エㇰ　ヒネ　アシケヘ　カ	
ek hine a=sikehe ka	来て、私の荷物も
ネア　アマチヒ、　ウㇰ　ヒネ、	
nea a=macihi (i) uk hine (i, mina)	妻が取って、
ミナ　トゥラ　ナ　ネン　ネン	
mina tura na nen nen	笑いながら、いろいろと
イコイソイタㇰ　コㇿ　アフナン　ヒケ　カ	
i=koysoytak kor ahun=an hike ka	私に話して、私が家に入ったところ
アマッネポホ　ウタㇻ　カ　イサㇺ	
"a=matnepoho utar ka isam	「娘たちもいないが、
マㇰ　ネ　ルウェ　ネ　ヤ	
(aa) mak ne ruwe ne ya"	どうしたのか？」と
アコウェペケンヌ　アクス	
a=kouwepekennu akusu	私が訊ねると
と、とうきょう　オルン　シノッ　エアㇻパ	
"TO, TOUKYOU or un sinot earpa	「と、東京へ遊びに行く
クナㇰ　イェ　パ　ヒ　クス…、	
kunak ye pa hi kusu (u, u,,, TO,)	と言ったので
とうきょう　オルン、　シノッ、	
TOUKYOU or un (u) sinot (a)	東京へ遊びに
アエパレ　ワ　イサㇺ　ルウェ　ネ　セコㇿ	
a=epare wa isam ruwe ne" sekor	行かせてしまったのです」と
ハウェアン…、　ルウェ　ネ　アクス	
hawean (ne, aw) ruwe ne akusu	言うと
ネ　カムイ　トノ　モㇱマノ　アン　ヒネ	
ne kamuy tono mosmano an hine	その旦那さんは黙っていて
ヤクン　ポロンノ　ウサ　オカイペ	
"yakun poronno usa okaype	「それなら、たくさんのいろんな物を
エチカシ　アオセ　ワ	
eci=kasi a=ose wa	お前の土産に持って

エカン　クス　ワ　たんす　オㇿ

ek=an kusu wa TANSU or　　来て、タンスの中に

アオマレ　ワ　エカン　クス

a=omare wa ek=an kusu　　入れて来たから

たんす　オッタ　アㇻパ　ワ、

TANSU or ta arpa wa (a)　　タンスのとこに行って

ヌカㇻ　ヤㇰ　ピㇼカ　セコㇿ

nukar yak parka″ sekor　　見るといい」と

ハウェアン　ルウェ　ネ　アクス

hawean ruwe ne akusu　　言うと

ネ　イウヌネ　ウェンサンペ

ne iunune[126] wensanpe　　その母親の根性悪が

エキネ　エネ　たんす　を…、

ek hine ene TANSU O, (uu,,, a,)　　来て、タンスの

アパ　マカ　ルウェ　ネ　アクス

apa maka[127] ruwe ne akusu　　開き戸をあけると

ネ　マッネポホ　ウタㇻ

ne matnepoho utar　　あの娘たちが

トゥン　ネ　ヒネ　オロ　タ

tun ne hine oro ta　　二人してそこに

オカ　ルウェ　ヌカㇻ　クス　オラ

oka ruwe nukar kusu ora　　いたのを見たので

エライキマテㇰ　ルウェ　ネ　アクス

eraykimatek ruwe ne akusu　　ひどく驚くと

キマテㇰ　オポソ　ナニ　ネア

kimatek oposo nani nea　　慌てる一方で、すぐにその

カムイ　トノ　ソヨㇱマ　ヒネ、

kamuy tono soyosma hine (e)　　旦那さんが外に飛び出して

エネ　アマッネポ　ウタリ

〝ene a=matnepo utari　　「あんなに娘たちを

---

126 イポネ ipone と同じ形のことばと解釈するが、各アイヌ語事典でイウヌネ iunuhe、イオナネ ionane という用例は見あたらなかった。中川裕『アイヌ語千歳方言辞典』草風館（1995）に、イマッネ imatne「妻である」があり、用例として「imatne menoko（妻である女）」がある。

127 アパマカ apamaka と記していたが、モニターから自動詞ではないことを指摘され、アパ　マカ apa maka と他動詞の形で記した。アパ apa （戸、戸口）という表現なので、姉妹は引き出しではなくて開き戸のあるタンスに隠れていたと思われる。

ピㇼカノ　エヤㇺ　クニ　アイェ　コㇿ
pirkano eyam kuni a=ye kor (o)　　大事にすれと私が言って
アホッパ　ㇷ゚　ヒナㇰ　ワ
a=hoppa p hinak wa　　残して行ったものを、どこから
エネ…、ナ　ネン　ネン　カ
ene (us,,,) na nen nen ka　　このようにいろいろと
カㇻ　オルㇱペ　アヌ　ヒ　アン
kar oruspe a=nu hi an″　　あった話をわしが聞いたと思うか」
セコㇿ　ハウェアン　コㇿ
sekor hawean kor　　と言うと
ネ　マチヒ　トイコキㇰキㇰ[128]　ヒネ
ne macihi toykokikkik hine　　その妻を激しく叩いて
オロ　タ…、オアンライケ
oro ta (oo,) oar rayke　　そこですっかり殺し
ルウェ　ネ　ヒ　ワ、　ルウェ　ネ　ヒネ
ruwe ne hi wa, ruwe ne hine　　てしまって
オラノ　エアシㇼ　ネ　アオナハ　トゥラノ
orano easir ne a=onaha turano　　それから初めて父さんと一緒に
ナン…、　オロ　タ　アフㇷ゚アン　ワ
nan??, oro ta ahup=an wa　　そこに入って
オラノ　ネ　アウテㇰ　シサㇺ　ウタㇻ
orano ne a=utek sisam utar　　それからその稼ぎ人たち
ネ　ヤッカ…、
ne yakka (a=uko, ao,)　　であっても
ネ　カムイ　トノ　コパㇱロタ　コㇿ
ne kamuy tono kopasrota kor　　その立派な旦那さんが罵った。
ネ　アウテㇰ　シサㇺ　ウタㇻ　ネ　ヤッカ
ne a=utek sisam utar ne yakka　　その稼ぎ人たちであっても
オピッタ、オケウパ　ヒネ　オラ、スイ、
opitta (a) okewpa hine ora, suy (o)　　全て追い出して、それからまた

[128] 実際にはトイコ、キ、キㇰキㇰ toyko, ki, kikkik のように聞こえる。また、この辺りから妹の一人称の語りに替わっている。原典では、父親が後妻を殺す場面で、叩いた後で馬の尻に繋いで走らせて殺しているが、この殺害方法は久保寺逸彦『アイヌの昔話』三弥井書店（1971）の「股裂きにされた商人の妻」の妻の殺害方法のモチーフと似る。上田氏は馬を登場させていない。上田氏の人間の散文説話では、根性の悪い家族を父親が殺すという場面のあるものは少なからずあるが、本テキストと同様に叩き殺す方法で語られる。馬を登場させないことは人間の散文説話に近くなる要因となる。

アシㇼノ　シサㇺ　アウテㇰ　シサㇺム
asir no sisam a=utek sisam　　新しく和人の稼ぎ人の、和人の
オッカイポ　ウタㇻ　スイ　アシンノ、
okkaypo utar suy asir no (o)　　青年たちをまた新たに
アオナハ　アフンケ　ヒネ　オラノ
a=onaha ahunke hine orano　　父さんが雇い入れて
オロ　タ　アオナ　トゥラノ
oro ta a=ona turano　　そこで父さんと一緒に
オカアン　ワ　オラノ　アナㇰネ
oka=an wa orano anakne　　暮らしてからというのは
ネㇷ゚　ネㇷ゚　アコンルスイ
nep nep a=kor rusuy　　何を欲しいとか
アエルスイ　カ　ソモ　キ　オラ
a=e rusuy ka somo ki ora　　食べたいとか言わないで
エイタサ　マㇰ　ネ　ヒネ　エネ
〝eytasa mak ne hine ene　　「あんなに、どうしてあのように
ウェイサンペコㇿ　ネ　ヤ
weysanpekor ne ya〟　　悪い根性になったのでしょう？」
アコウェペケンヌ　アクス
(a=ko,) a=kowepekennu akusu　　私が訊ねると
ホㇱキノ　アン　マッネポホ　アナㇰネ
〝hoski no an matnepoho anakne　　「最初にいた娘は
エアㇻキンネ　サパ　ピㇼカ　ㇷ゚　オラ、
earkinne sapa pirka p ora (a)　　本当に頭が良いのに、
アコㇿ　マッネポホ　サパ　ウェン　ワ、
a=kor natnepoho sapa wen wa (a)　　私の娘は頭が悪い
クス　その　ホㇱキ　アン　マッネポホ
kusu SONO hoski an matnepoho　　ので最初にいた娘を
アライケ　ヤㇰ　ヒネ　オラ
a=rayke yak hine ora　　殺したら、それから
アコㇿ　マッネポホ　ウサ　オカイペ
a=kor matnepoho usa okaype　　私の娘がいろいろな財産を
オピッタ、　コㇿ　クニ　アラム、
opitta (a) kor kuni a=ramu (a)　　全て持つようになると思った。
その　ホㇱキ　アン　マッネポホ
SONO hoski an matnepoho　　その最初にいた娘が

アン　ヤクン、　ソンノ　アマッネポ	
an yakun (a=kor,) sonno a=matnepo	いたら、私の本当の娘が
イコイトゥパ　クニ　アラム　ワ　クス、	
ikoytupa kuni a=ramu wa kusu (u)	羨むだろうと思ったので
ナ　ネウン　ネウン　アカㇻ　ヤッカ	
na neun neun??[129] a=kar yakka	いろいろしたけれども
アライケ　コヤイクサ　ㇷ゚	
a=rayke koyaykus a p (ta,)	殺すことが出来なかったが
タネ　アナㇰネ、パㇻコアッ、アン	
tane anakne (e) parkoat (se??) =an″	今はとうとう罰があたってしまった」
セコㇿ　ハウェアン　コㇿ、	
sekor hawean kor,	と言いながら
コㇿ　パラパラㇰ　ヒ　イェ　カ	
kor paraparak hi ye ka	泣きわめいて言っても
アオナハ　ヌ　ハウェ　カ	
a=onaha nu hawe ka	私の父さんは聞きも
イサㇺノ　ライケ、　オカ　タ	
isam no rayke (e) oka ta	しないで、彼女を殺した後で
ピㇼカ　ウレㇱパ　アキ　コㇿ	
pirka urespa a=ki kor	とても互いを大事にしながら
アナン　ワ　オラノ　アサ　アナㇰネ	
an=an wa orano a=sa anakne	暮らしていたら、私の姉さんは
ナニ　ネ　ピㇼカ　オッカヨ　トゥラノ	
nani ne pirka okkayo turano	すぐに立派な青年と一緒に、
アコㇿ　アオナハ　オカケ　タ　アン　ワ	
a=kor a=onaha oka hike[130] ta an wa	父さんのいるところで暮らして
オラ　ヤイカタ　アナㇰネ	
ora yaykata anakne	それから、自分の方は
ピㇼカ　チセ、　チセ　ソイ　タ	
pirka cise (su, e) cise soy ta	立派な家をその家のそばに
アカㇻ　ワ　オロ　タ　アナン　ワ	
a=kar wa oro ta an=an wa	建てて、そこにいて

[129] 二つめのネウン neun は聞こえにくく、ヌ nu のようにも聞こえる。
[130] オカケ okake「(亡くなった) 後で」と聞こえるが、上田氏の日本語訳では姉夫婦は父親と一緒に暮らしていることになっているので、オカ　ヒケ oka hike 「いた方」と解釈してローマ字表記と日本語訳を記した。

オロ　タ　スイ　ナニ　ピㇼカ　オッカイポ	
oro ta suy nani pirka okkaypo	そこでまた、すぐに立派な青年
トゥラノ　オカアン　ワ　オラノ	
turano oka=an wa orano	と一緒に暮らしてから
ウコパヨカアン　ラポッケ	
ukopayoka=an rapokke	お互いに行き来していたところ
アサ　カ　ポコㇿ　ヤイカタ　カ	
a=sa ka pokor yaykata ka	姉さんが子供を授かり、自分も
ポコㇿアン　ワ　ピㇼカ　ウレㇱパ　アキ　コㇿ	
pokor=an wa pirka urespa a=ki kor	子供を授かって立派に育てて
オカアン　アイネ　アオナハ　カ	
oka=an ayne a=onaha ka	暮らしていたら、父さんも
アオンネレ　ア　コㇿカ	
a=onnere a korka	あの世に送ったけれども
ネイ　パㇰノ　オカアン　アイネ　ヤッカ	
ney pakno oka=an ayne yakka	それまでは私が暮らしていても
ウコケウトゥㇺ　サㇰノ　アサ　トゥラノ、	
ukokewtum?? sak no[131] a=sa turano (o)	お互いに悪気なく（？）姉さんと一緒に
ピㇼカ　ウレㇱパ　アキ　アイネ	
pirka urespa a=ki ayne	仲良く暮らしたあげくに
オンネ　アン　ペ　ネ　アクス	
onne=an pe ne akusu	私が死んだものであると
アイェ　セコㇿ、　シサㇺ　カッケマッ	
a=ye sekor (si,) sisam katkemat	言ったと、和人のご婦人が
イソイタㇰ　セコン　ネ	
isoytak sekor ne.	物語ったのですと。

参考文献

・稲田浩二・小澤俊夫編『日本昔話通観　第１巻　北海道（アイヌ民族）』同朋社（1989）

・遠藤志保「和人の散文説話の特徴－『鬼鹿毛』と小栗照手譚の比較から－」、千葉大学文学部『文学部の新しい波（2001年度優秀卒業論文集）』千葉大学文学部（2002）

・奥田統己編『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集（CD-ROMつき）』札幌学院大学人文学部（1999）

・小澤俊夫『昔話入門』ぎょうせい（1997）

131 ウコケウトゥㇺウェン　サㇰノ ukokewtumwen sakno「お互いに仲違いすることなく」と言おうとしたがウェン wen「悪い」が抜けた可能性がある。

・萱野茂『カムイユカㇻと昔話』小学館 (1988)
・萱野茂『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂 (1996)
・萱野茂編『萱野茂のアイヌ神話集成 第3巻 カムイユカㇻ編Ⅲ』ビクターエンタテインメント (1998)
・金田一京助『ユーカラ概説』青磁社 (1931)
・久保寺逸彦『アイヌの昔話』三弥井書店 (1971)
・久保寺逸彦「文学(アイヌの項目)」『ブリタニカ国際大百科事典1』ティビーエス・ブリタニカ (1972)
・久保寺逸彦『アイヌの文学』岩波書店 (1977)
・久保寺逸彦『アイヌ叙事詩　神謡・聖伝の研究』岩波書店 (1977)
・財団法人アイヌ民族博物館『アイヌ民族博物館伝承記録3・昔話　上田トシのウエペケㇾ』財団法人アイヌ民族博物館 (1997)
・ジョン・バチラー『アイヌ・英・和辞典　第四版』岩波書店 (1938)
・関敬吾『日本昔話集成』全6巻、角川書店 (1950-)
・田村すず子『アイヌ語音声資料3』早稲田大学語学教育研究所 (1986)
・田村すず子『アイヌ語沙流方言辞典』草風館 (1996)
・知里真志保『アイヌ文学』元々社 (1955)
・知里真志保『アイヌ民譚集』郷土研究社 (1937)
・中川裕『アイヌ語千歳方言辞典』草風館 (1995)
・中川裕・志賀雪湖・奥田統己「アイヌ文学」『岩波講座日本文学史第17巻　口承文学2　アイヌ文学』岩波書店 (1997)
・中川裕『アイヌの物語世界』平凡社 (1997)
・日本民話の会編『決定版　日本の民話事典』講談社 (2002)
・野村純一編『別冊國文學NO.41　昔話・伝説必携』學燈社 (1991)
・荻中美枝『アイヌの文学　ユーカㇻへの招待』北海道出版企画センター (1980)
・林　誠「北海道立図書館所蔵マイクロフィルム「金田一京助採録ユーカラ・ノート」の細目次」所収『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要　第13号』北海道立アイヌ民族文化研究センター (2007)
・平石清隆『沙流地方のウウェペケㇾ』私家版 (財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構の出版助成を受けて一部を補訂し公刊したもの (2003)
・北海道立アイヌ民族文化研究センター『北海道立アイヌ民族文化研究センター資料目録5　久保寺逸彦文庫　文書資料・写真資料目録』北海道立アイヌ民族文化研究センター (2001)
・本田優子編『札幌大学附属総合研究所 研究叢書1 伝承から探るアイヌの歴史』札幌大学附属総合研究所 (2010)
・三浦佑之「継子譚と家族」『群像』45-12、講談社 (1990)
・山田野理夫・東北農山漁村文化協会編『日本の民話4　宮城・みちのく篇』未来社 (1977)